HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	西フリジア語の文法構造 : 接続詞
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大學文學部紀要, 46(3), 65-121
Issue Date	1998-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33712
Type	departmental bulletin paper
File Information	46(3)_PL65-121.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 46-3 (1998)

西フリジア語の文法構造 ── 接続詞 ──

清　水　　誠

Struktuer fan it Westerlauwersk Frysk

── bynwurd ──

(*The Annual Report on Cultural Science* 46-3 (No.93). The Faculty of Letters. Hokkaido University. Sapporo. Japan 1997. ISSN 0437-6668)

SHIMIZU Makoto

X　接続詞 (it bynwurd)

§64　はじめに

接続詞は並列接続詞 (it lykskikkend bynwurd §65) と従属接続詞 (it ûnderskikkend bynwurd §67) に分かれる。並列接続詞は統語的に同等の文や文成分を結びつけ，従属接続詞は統語的に同等でない文や文成分を結びつける。

並列接続詞は文成分としての価値をもたず，主文の文頭に置かれた場合，後続する文の語順には影響を与えない。

Juster *is* er net thúskommen.「昨日彼は帰宅しなかった」

→*En* juster *is* er net thúskommen.「そして，昨日彼は帰宅しなかった」(en「そして」従属接続詞)

Dan is er juster net thúskommen.「それから彼は昨日帰宅しなかった」(dan「それから」副詞)

一方，従属接続詞は主文の文成分となる従属文を伴い，語順は定動詞が文末に置かれ，従属接続詞とともにいわゆる「枠構造」(§ 67 (1)) をつくる。従属文は「補文」とも言う。「補文」という用語は不定詞句を含めて用いることがある。

Sy wit net *dat* er juster net thúskommen *is*.「彼女は彼が昨日帰宅しなかったのを知らない」

Sy wit net *oft* er juster thúskommen *is*.「彼女は彼が昨日帰宅したかどうか知らない」

従属接続詞は従属文を導く点で関係詞や間接疑問文の疑問詞と共通しており，本書では 3 者をまとめて「補文導入要素」(§ 36 (1), § 38 (1)) と呼ぶ。西フリジア語の従属文では補文導入要素がその中核となる「補文標識」(de komplemintearder) を原則としてかならず伴っており，これが従属文を導くはたらきをする。定形の動詞を含む従属文（補文）を導く補文標識には dat [dɔt] とその縮約形 't [t] がある（不定形の動詞を含む不定詞句（補文）を導く補文標識には om がある)。補文標識がなければ，上記の補文導入要素はそれぞれたんなる副詞，前置詞，指示詞，疑問詞になり，従属文を導くことはない (§ 66)。

{*Wêrom't/Wêrom} *is* er juster net thúskommen?「どうして彼は昨日帰宅しなかったのだろう」(疑問詞)

Sis mar {*wêrom't*/**wêrom*} er juster net thúskommen *is*.「なぜ彼が昨日帰宅しなかったか言ってみなさい」(補文導入要素：間接疑問文の疑問詞)

補文標識は主文の定動詞と同じ位置を占めるために，補文標識がその位置を占めている場合には，定動詞は文末にとどまって「枠構造」をつくる。また，§ 38 (5)で述べたように，従属文の主語が 2 人称親称単数の代名詞の場合には，補文標識は定動詞と同様に「活用」し，変化語尾 -st を伴う (§ 66 (4))。

Sis mar *wêrom'tsto* juster net thúskommen *bist*.「なぜあなたが昨日帰宅しなかったか言ってみなさい」(wêrom'tsto←wêrom＋'t＋st＋o [←

do])

補文標識には dat とその縮約形 't があるが，この両者と oft [ɔt]（口語 at [ɔt]）（←of＋'t），as [ɔs] の使い分けには注意が必要である。oft は間接疑問文で用いるほかに，補文標識の実現を助ける形式的な手段として用いることがある（§ 66 (1), (2), (3)）。補文標識に縮約形が存在し，補文導入要素がかならず補文標識を伴い，補文標識が活用する点は，同じく動詞定形第 2 位の文構造をもつオランダ語やドイツ語の規範的な標準語にはない西フリジア語の特徴である。

とくに従属接続詞 dat はふつう従属文を伴うが，用法によっては主文を伴うことがあり，注意を要する（§ 67 (3)）。

§ 65　並列接続詞（it lykskikkend bynwurd）

(1)　用法

統語的に同等の文や文成分を結びつける接続詞を並列接続詞という。並列接続詞は主文が後続する場合には前域のさらに前に置かれ，後続する主文の語順に影響を与えない。

It *is* soms tige waarm.「ときどきとても暑いことがある」

→Yn 'e simmer bloeit alles, de beammen sitte fol blêden *en* it *is* soms tige waarm.「夏にはすべてが花を咲かせ，木々は葉をたくさんつけ，そして，ときどきとても暑いことがある」（ULI'S，A 11：9）

並列接続詞に後続する主文は先行する文から統語的に独立しており，先行する文とは別の文として現われることがある。

"Dat bestiet net." "*En* dochs is it wier."「そんなことはないよ」「でも本当なんだ」（ULI'S，A 18：10 変更）

表わす意味は列挙，選択，反対，帰結，根拠などの論理・因果関係がおもなものである。

二つの主文に共通する要素は省略することがあり，これを「空所化」（エ. gapping）という。ただし，want「というのは，なぜなら」では空所化は起こらない。

Op 'e dyk ride twa jonges op fytsen *en* in frou Ø yn in auto.「道路では男の子が二人，自転車に，女性が一人，車に乗っている」(ULI'S, A 8：7)

並列接続詞がなくても「空所化」は起こる。

De mitselder fan in muorre helpe wy oan stiennen. De ferver Ø oan in ljedder en in kwast.「壁を作る左官屋さんに私たちは石を運ぶ手伝いをします。塗装屋さんにははしごとはけを（もってくる手伝いをします）」(ULI'S, A 14：8)

並列接続詞としてはたらく語には，別の意味で副詞や従属接続詞としてはたらくものがある（例. (2)(a) as, (c) mar, (d) of)。また，同じ意味を表わす同一の語が並列接続詞としても副詞としてもはたらく場合がある ((3))。主文を伴う dat も並列接続詞と認められる点があるが，詳細は§ 67 (3)で扱う。

(2) 種類と用例

(a) as [ɔs]「…でなければ」

Hy wol net dokterje, *as* hy moat twongen wurde.「彼は無理やり強制されるのでなければ，医者には行きたがらない」(Zantema 1984：40)

☞ as は別の意味で従属接続詞（§ 67 (2)(a)）としても副詞（§ 52 (2)(a)）としても用いる。

(b) en [ɛn]「そして，また，…と；一方；それで，そのために」

① 2つの文や文成分をつなげる場合

Dêr hâlde de dream op *en* hy skeat oerein.「そこで夢は終わり，彼は飛び起きた」(ULI'S, A 6：8 変更)

Se sitte by de tafel *en* drinke kola.「彼らは食卓についてコーラを飲んでいる」(ULI'S, A 1：13)

De bern swaaie *en* laitsje nei in boer op 'e paralleldyk.「子供たちは向こうの道にいる農夫に向かって手を振り，笑いかける」(ULI'S, A 4：11)

Pake krijt in tút *en* in presintsje.「祖父はキスとプレゼントを受ける」(ULI'S, A 1：13 変更)

In keatsbal is lyts *en* tige hurd.「ケアツェン（フリースラントの伝統的な球技）のボールは小さくてとても硬い」(ULI'S, A 5：9)

② 3 つ以上の文成分を列挙する場合

3 つ以上の文成分を列挙するときには，ふつう最後の文成分の前に en を置く。

De tiden fan it jier binne de maitiid, de simmer, de hjerst *en* de winter.「一年の季節には春，夏，秋，そして冬があります」(ULI'S, A 11：8)

Heit giet yn in stoel sitten, skuort de slûf iepen *en* begjint te lêzen.「父はいすにすわり，封筒を開けて読みはじめる」(ULI'S, A 3：10)

③ 'en＋命令形不定詞'

「命令形不定詞」の章で述べる。

(c) mar [mar]「しかし，…が；ただし，もっとも」

Hja hie der gâns lêst fan. *Mar* hja klage net.「彼女はそのことでひどく迷惑していた。しかし，彼女は不平を言わなかった」(ULI'S, B 2：13 変更)

Wy hawwe hiel ús libben yn Westergeast wenne, *mar* it is hjir de lêste jierren wol feroare.「私たちは生まれてからずっとヴェステルゲアスト（オ．Westergeest ヴェステルヘースト）で暮らしてきましたが，最近の何年かでここはたしかに変わりました」(ULI'S, B 8：15 変更)

① net ～ mar...「～ではなくて…だ」

It praat fan 'e bern is net mear Frysk, *mar* Hollânsk.「子供たちの話す言葉はもはやフリジア語ではなく，オランダ語です（Hollânsk は Nederlânsk に比べてフリジア語との対比を意識した表現）だ」(ULI'S, B 8：15 変更)

② net allinne ～, mar (...) ek...「～だけでなく…だ」

De bewenners koene mekoar *net allinne* fan gesicht, *mar* hja wisten fierder *ek* alles fan mekoar.「住民はたがいに顔見知りだっただけでな

く，さらにおたがいのことをすべて知りあっていた」(ULI'S，C 11：2)

Ik hear dan *net allinne* de nachtlike stilte, *mar* ynien *ek* de lûden fan de nacht.「すると，私には夜の静けさだけでなく，不意に夜の音も聞こえてくる」(ULI'S，B 20：15)

③ wol～mar...「たしかに～だが，(しかし)…だ」

Ferline wike hawwe wy noch *wol* in daverjende rûzje hân, *mar* dy duorre net langer as tsien minuten.「先週，私たちはすごいけんかをしたけど，ものの10分と続かなかったわよ」(Bangma 1993²：10変更)

④ marの位置

marは「しかし」など「反対」を意味する場合にはもっぱら文頭で用いる。文中ではかわりにlykwolsなどを用いる。

De fuotsjes binne him kâld. *Mar* hy hâldt fol.「彼は足が冷たいのだ。しかし，がまんしている」(ULI'S，B 5：9)

⇔De fuotsjes binne him kâld. Hy hâldt {**mar*/*lykwols*} fol.「同上」

Hy soe de skonken út it bêd draaie. *Mar* it slagge net.「彼は足を動かしてベッドから出そうとした。しかし，うまくいかなかった」(ULI'S，A 6：8変更)

⇔Hy soe de skonken út it bêd draaie. It slagge {**mar*/*lykwols*} net.「同上」

☞ marは「…だけ」という別の意味の副詞（§ 52 (2)(b)）および心態詞（§ 53 (2)(b)）としても用いる。

Dêr steane *mar* in pear wenten mear.「そこにはもはや数軒しか家がたっていない」(mar「…だけ」副詞)(ULI'S，B 11：15変更)

"Der binne ek sa'n soad minsken." "Ja, it is *mar* drok."「たくさん人もいることですし」「ええ，ほんとにせわしないこと」(mar心態詞)(ULI'S，A 1：10変更)

(d) of [ɔf]「または，…か，…ないしは，…というよりむしろ」など

Is dat alles *of* hast noch mear?「それで全部かい，それともまだあるのかな」(ULI'S，A 18：10変更)

It deistich miel bestie út brij fan nôtprodukten, mei sa no en dan wat fisk, fleis *of* aaien.「日々の食事は穀物のおかゆにときどき少し魚，肉または卵が入ったものから成り立っていた」(ULI'S，B 3：11)

次の用法に注意。

① of...of...「…か…か」

Do kinst *óf* dit *óf* dat krije.「君はこれかあれのどちらかをもらえる」

Yn 'e grammatika's en yn ûnderskate artikels wurdt it wol te praat brocht, mar *óf* der wurdt koart mei ôfbreide *óf* it leit bûten it bestek fan wat behannele wurdt.「文法書や種々の論文でそれが話題にのぼることはあるが，短絡に終わるか，あるいは扱われる範囲外に置かれているかのどちらかである」(Visser 1988b：175)

(上記 óf，ðf のアクセント記号は強調して発音することを示す補助記号)

② ofte [ɔ́ftə]

特定の表現で用いる。

myn ofte mear「多かれ少なかれ」nea ofte nimmer「けっして…ない」

☞ myn of mear「同上」，nea of nimmer「同上」とも言う。

③ of net (soms)「付加疑問」(エ．tag question)

文の最後に添えて相手の反論を予想し，それを先取りして示す。

It leit fêst lekker sa ûnder de tekkens, *of net soms*?「そうやって毛布にくるまっているのはさぞ気持ちがいいんじゃないのかい」(ULI'S，A 6：8)

☞ soms は「ときどき」という意味ではない。

☞ of の「あたかも…のように」という別の意味の副詞としての用法は§ 52 (2)(a)②，同じ意味の従属接続詞 oft（口語 at）の用法は§ 67 (2)(r)参照。

④「約…」(§ 47 (2)(h))

Pake is in jier *of* wat lyn ferstoarn.「祖父は 1 年ほど前に亡くなった」(ULI'S，B 11：6 変更)

⑤ 否定文の後で

i）「…するや否や～」

As de sinne ûndergiet, duorret it *net* lang *of* de minsken sette ôf.「太陽が沈むとまもなく人々は出発する（＝人々が出発するには長くかからない）」（ULI'S，B 5：11）

ii）「…しないような～」,「…しないほど～」

意味的に関係文の「関係詞＋否定」や比較構文の「as＋否定」に相当する。

Der is *gjin* ko sa swart *of* der sit wol in wyt hier oan.「どんなに黒くても白い毛が交じっていない牛はいない（＝完璧な人はいない。ことわざ）」（Beintema 1990：77）

Der is *gjin* wet *of* de duvel fynt der wol in gat yn.「悪魔が（その中に）穴を見つけないような法律はない（ことわざ）」（ib. 139）

In fûgel fljocht *noait* sa heech *of* hy siket syn iten op 'e grûn.「鳥は地上の食べ物が見えなくなるほどけっして高く飛ぶことはない（＝どんなにうぬぼれても一度は現実にかえる必要がある。ことわざ）」（ib. 47）

Yn in tiid fan tanimmend ferkear en kontakt mei oare streken en lannen kin it hast *net* oars *of* der belânje hjirre ek planten út oare kontreien wei.「異郷や異国との通行や接触が増す時代にあっては，ここでもよその土地から植物が漂着することは避けられない」（Bosma-Banning 1981²：115 変更）

次例は ik wit net better of「私の知り得る限りでは」という慣用句的な表現である。better as ik (net) wit あるいは better net te witten とも言う。

Ik wist net better of it hearde sa.「私はてっきりそれで良いとばかり思っていました（＝すみません）」（←私の知り得る限りではそれはふさわしかったのです←それではふさわくないということ以上のことが私にはわかりませんでした）（Boersma/Van der Woude 1980²：88 変更）

(e) want [vɔnt]「というのは，なぜなら」（話者の判断の根拠を示す）

De beppesizzers binne tige machtich, *want* ús mem hat fjouwer

bruorren en trije susters.「孫はたいへん数が多いのです。というのは，母には男の兄弟が 4 人と女の兄弟が 3 人いるからです」(ULI'S, B 11：6 変更)

Skuorbot kaam algemien foar, *want* griente waard hast net iten.「壊血病はよく起きる病気だった。なぜなら野菜がほとんど食用にされなかったからである」(ULI'S, B 11：9)

次の点に注意。

① 空所化

want に後続する主文では，他の並列接続詞の場合とは違って空所化は起こらない (Tiersma 1985：121)。

Ik moat rinne, *want* {ik/*∅} ha in lekke bân.「私は歩かなくてはならない。パンクしたからだ」(ULI'S, A 19：18 変更)

② 従属接続詞 om't, omdat「…なので」(§ 67 (2)(s)) との相違

i) 語順

並列接続詞 want と違って従属接続詞 om't, omdat は枠構造をつくる。

Hy komt net, *want* hy *is* siik.「彼は来ない。病気だからだ」

Hy komt net, {*om 't/omdat*} er siik *is*.「彼は病気なので来ない」

want で結ばれた 2 つの主文は統語的に独立している。一方，om't, omdat が伴う従属文は主文の文成分になる。したがって，'want＋主文' はつねに先行する主文に後続し，om't, omdat と違って前域に置かれることはない。人称代名詞連接形 er の可否にも注意 (§ 38 (2))。

Hy kin net komme, *want* {*hy*/**er*} is siik.「彼は来られない。というのは彼は病気だからだ」

→* *Want* {*hy/er*} is siik, kin er net komme.「病気なので彼は来られない」

Hy kin net komme, {*om 't/omdat*} {*hy/er*} siik is.「彼は病気なので来られない」

→{*Om 't/Omdat*} {*hy/er*} siik is, kin er net komme.「病気なので彼は来られない」

ii）話者の判断の根拠（want）と因果関係（om't，omdat）

want は先行する文にたいする話者の判断の根拠を表わす。一方，om't，omdat は主文と従属文のあいだの因果関係を表わす。

たとえば，次の 4 例で最後の文は自然現象の説明として不自然である。

De beam jout skaad, *want* de sinne skynt.「木が影をおとしている。日が照っているからだ」

De sinne skynt, *want* de beam jout skaad.「日が照っている。木が影をおとしているからだ」

De beam jout skaad, {*om 't/omdat*} de sinne skynt.「日が照っているので，木が影をおとしている」

*De sinne skynt, {*om 't/omdat*} de beam skaad jout.「木が影をおとしているので，日が照っている」

次の用例では want のかわりに om't，omdat を用いると不自然になる。

Bou in arke en gean der mei dyn gesyn yn. *Want* ik sil de hiele ierde ûnder wetter rinne litte.「方舟を作り，家族とともにその中へ入れ。なぜなら（＝なぜ私がこう言うかというと）私は地上にあるものをすべて水底に沈めてしまうからである」(De Arke fan Noach)

Harkje goed wat der barde mei dy twa, *want* dit is in wier ferteltsje.「この二人に何が起こったかよくお聞きなさい。というのは，これは本当のお話なのですから」(Bosma-Banning 1981[2]：15)

iii）否定のスコープ（エ．scope）

'want＋主文' は '{om't/omdat}＋従属文' と違って，否定のスコープ（＝範囲）には入らない。話者の判断の根拠を話者自身が否定するのは不自然だからである。

Hy bleau thús, *net om 't* syn frou siik wie.「彼は奥さんが病気だったので家にいたというわけではない」

*Hy bleau thús, *net want* syn frou wie siik.「同上」

次の用例では '{om't/omdat}＋従属文' を 'want＋主文' で置きかえると，同じ意味を保つことができない。

Dy hege hearen litte har plan no [*net mear* [bedjerre, *om 't* wy it net ljie wolle]].「お偉方は私たちがいやだからといって，計画をつぶしたりすることはもはやない」(ULI'S，B 11：15)

☞ オランダ語の want と omdat，ドイツ語の denn と weil にも同様の相違がある。英語の for と because の相違も類似している。西フリジア語とオランダ語の want は中高ドイツ語の wande，want や古高ドイツ語の wanta に語形的に対応するが，現代の標準ドイツ語には残っていない。

(3) 同じ意味で並列接続詞としても副詞としてもはたらくもの

(a) dus [døs]「したがって，それで」

① 従属接続詞

Sy wie it der mei iens, *dus* wy rekkenje op har meiwurking.「彼女はそれに賛成しました。だから，私たちは彼女の協力を見込んでいます」(Boersma/Van der Woude 1980²：88 変更)

② 副詞

Dus rekkenje wy op har meiwurking.「同上」

Wy rekkenje *dus* op har meiwurking.「同上」

Wy rekkenje op har meiwurking, *dus*.「同上」

En *dus* {*rekkenje wy*/**wy rekkenje*} op har meiwurking.「同上」

(b) lykwol(s) [líkvol(s), likvôl(s)]「けれども，しかしながら」

① 並列接続詞

(2)(c) mar も同様の意味でより頻繁に用いるが，lykwols のほうが逆接の意味が強い。

In grut lêzer wie se net, *lykwols* dat tydskrift *sloech* se nea oer.「彼女は大の読書家ではなかったが，その雑誌を読むのは欠かさなかった」(Boersma/Van der Woude 1980²：88 変更)

Lykwols de lêste jierren, no't de enerzjy sa krap en djoer wurdt, *krije* de gasboarders ek hieltyd mear de kâns om gatten yn it Waad te boarjen.「しかしながら，最近の何年かのように，エネルギーが不足し

て高価になると，天然ガスの開発業者がヴァート地帯（オランダ北部沿岸の干潟地帯）に穴を掘る機会がますます多くなる」(ULI'S，B 11：17)

② 副詞

Ik haw it him ferbean, *lykwols hat* er it dochs dien.「私は彼がそれをすることを禁止しました。しかしながら，彼はそれをやってしまったのです」(Zantema 1984：574)

Fabryk B wol *lykwols* ek graach sa'n soarte middel op 'e merk bringe om mei konkurrearje te kinnen.「しかし，製造所Bとしても競合できるようにそのような薬を市場に持ちこもうと考える」(ULI'S，C 6：10)

As bern mochten wy oeral mei boartsje, mei brea of bôle *lykwols* net.「子供の頃，私たちは何を相手に遊んでもよかった。けれども，ライ麦パンやふつうのパンが相手ではいけなかった」(Bosma-Banning 1981²：137)

(c) alteast [ɔltĺəst]「少なくとも」

① 並列接続詞

Sy is net opdaagjen kommen, *alteast* ik *haw* har noch net sjoen.「彼女はまだ姿を見せていません。少なくとも，私は彼女にまだ会っていません」(Boersma/Van der Woude 1980²：88 変更)

Hy is der net, *alteast* ik *haw* him net sjoen.「彼はいません。少なくとも，私は姿を見かけませんでした」(Zantema 1984：33)

② 副詞

Ik haw har *alteast* noch net sjoen.「私は少なくとも彼女にまだ会っていません」(Boersma/Van der Woude 1980²：88 変更)

(d) teminsten [təmé:ⁿs(t)ən])「少なくとも」

① 並列接続詞

Hy hie der wakker sin oan, *teminsten* sa *liet* er him út.「彼はそれにたいしてやる気があった，少なくとも彼はそう言っていた」(Boersma/

Van der Woude 1980²：88)

② 副詞

Hy liet him *teminsten* sa út.「少なくとも彼はそう言っていた」(同上)

§66 補文導入要素と補文標識

従属接続詞は従属文を導く点で関係詞や間接疑問文の疑問詞と共通しており，3者をまとめて「補文導入要素」と呼ぶことにする（§36(1)，§38(1)）。§67で従属接続詞を扱うまえに，補文導入要素と補文標識について説明する。

(1) 補文標識の用法と従属文の種類

(a) 補文標識の用法

補文導入要素は一般に次の語形からなる。

指定部（副詞・前置詞/指示詞/疑問詞）＋補文標識（dat [dɔt]/'t [t]）

☞ 統語的に補文標識 dat，'t は「主要部」(エ. head) に相当し，直前の要素は「指定部」(エ. specifier) に相当する。

補文導入要素は原則として「補文標識」(de komplemintearder) を義務的に伴い，これが従属文を導くはたらきをする。この点で補文標識は統語的に従属文の中核をなす。指定部は従属文の種類を示す。

☞ 西フリジア語ではオランダ語と同様に，従属文とともに補文と呼ばれる不定詞句（te＋動名詞）も補文標識 om を伴う（om...te＋動名詞）。従属文の補文標識 dat，'t を「定形補文標識」(エ. finite complementizer)，不定詞句（te＋動名詞）の補文標識 om を「不定形補文標識」(エ. infinite complementizer) と呼ぶ。

☞ 補文導入要素が補文標識 dat，'t を義務的に伴うようになったのは19世紀後半のことである（Van der Woude 1960)。

補文標識には dat と 't がある。't は dat が形態的に縮約されたもので(縮約形)，直前に（ふつうの形容詞や名詞のような機能語以外の要素を除く）指定部がある場合にその語末に添えられ，全体で1語としてつづる。dat は従属文が主文の主語や目的語としてはたらいている場合や，平叙文の

意味の「同格節」(エ. apposition clause；例. it feit dat-従属文「…という事実」) のように，指定部を欠くときに用いる (疑問文の意味の同格節には oft (口語 at) を用いる。例. de fraach oft-従属文「…かどうかという疑問」)。'前置詞＋従属文' では dat と 't の両方が可能である。

従属文が平叙文の場合には補文標識 dat だけで補文導入要素を形成し，選択疑問文である場合には補文導入要素として oft [ɔt] (口語 at [ɔt]) 「…かどうか」を用いる。oft は口語で at とつづり，'of [ɔf] 「または」＋'t' と分析される。

(b) 従属文の種類

補文標識 dat，'t を中核とする従属文には以下の種類がある。

① 従属接続詞 (副詞＋補文標識 't)

付加成分 (エ. adjunct) としてはたらく。

{*Doe dat/Doe 't/*Doe Ø} er thúskaam, wie syn frou al op bêd.「彼が帰宅したとき，奥さんはすでに寝ていた」

⇔副詞

Doe kaam er thús.「そのとき彼は帰宅した」

② 従属接続詞 (前置詞＋補文標識 dat，'t)

付加成分としてはたらく。

Syn frou is lilk op him, {*omdat/om 't/*om Ø} er juster net thúskommen is.「奥さんは彼が昨日帰宅しなかったので怒っている」

⇔副詞 (「r-代名詞」＋前置詞)

Dêrom is er juster net thúskommen.「その理由で彼は昨日帰宅しなかった」

③ 従属接続詞 (Ø＋補文標識 dat)

i) 主語または目的語

補足成分 (エ. complement) としてはたらく。

{*Dat/*'t/*Ø} er juster net thúskommen is, lit him wol tinke.「彼が昨日帰宅しなかったことは十分あり得る」

Sy tinkt net {*dat/*'t/*Ø} er juster thúskommen is.「彼女は彼が昨日

帰宅したとは思っていない」

Sy is der wis fan, {*dat*/**t*/**Ø*} er juster net thúskommen is.「彼女は彼が昨日帰宅しなかったことを確信している」(前置詞の目的語)

ii) 同格節

修飾成分(エ. modifier)としてはたらく。

It feit {*dat*/**'t*/**Ø*} er juster net thúskommen is, falt net te ûntkennen.「彼が昨日帰宅しなかったという事実は否定できない」

⇔平叙文

Hy is juster net thúskommen.「彼は昨日帰宅しなかった」

④ 関係代名詞(指示代名詞+補文標識 't)

修飾成分としてはたらく。

Dit is de man {**dy dat*/*dy't*/**dy Ø*} juster net thúskommen is.「これが昨日帰宅しなかった男の人です」

⇔指示詞

Dy is juster net thúskommen.「その人が昨日帰宅しなかった」

⑤ 間接疑問文の疑問詞({疑問詞/of}+補文標識 't)

i) 主語・目的語

補足成分としてはたらく。

Sy wit net {**wêrom dat*/*wêrom't*/**wêrom Ø*} er juster net thúskommen is.「彼女はなぜ彼が昨日帰宅しなかったか知らない」

⇔疑問詞

Wêrom is er juster net thúskommen?「なぜ彼は昨日帰宅しなかったのだろう」

Sy wit net {**of dat*/*oft*/**of Ø*} er juster thúskommen is.「彼女は彼が昨日帰宅したかどうか知らない」

⇔選択疑問文

Is er juster thúskommen?「彼は昨日帰宅したのだろうか」

Sy is der net wis fan, {**wêrom dat*/*wêrom't*/**wêrom Ø*} er juster net thúskommen is.「彼女はなぜ彼が昨日帰宅しなかったのか定かで

ない」(前置詞の目的語)

⇔疑問詞

Wêrom is er juster net thûskommen?「なぜ彼は昨日帰宅しなかったのだろう」

ii) 同格節

修飾成分としてはたらく。

De fraach {**of dat/oft/*of Ø*} er jûn wol thûskomme soe, hat syn frou slim pleage.「彼が今夜帰宅するだろうかという疑問が奥さんをひどく苦しめた」(同格節)

⇔選択疑問文

Soe er jûn wol thûskomme?「彼は今夜帰宅するだろうか」

☞ dat は従属文が主文の主語・目的語としてはたらいたり,「r-代名詞」を介して前置詞の目的語になっているように,補文導入要素が指定部を欠く場合に用いる。平叙文の意味の同格節(例. it feit dat-従属文「…という事実」)も指定部を欠いている。これにたいして,縮約形 't は補文導入要素が指定部を伴う場合に用いる。

一方,補文導入要素が '前置詞+補文標識' の場合には dat と 't の両方が可能だが,これは補文導入要素がそれぞれ別の構造をしていると考えられる。すなわち,'前置詞+補文標識 dat' (例. omdat「…だから」)では,前置詞は「dat-従属文」に属しておらず,「dat-従属文」全体を外から支配していると考えられる。つまり,前置詞は補文導入要素の指定部にはなく,補文導入要素の外にあることになる。これは主文の主語・目的語としてはたらく「dat-従属文」が従属文に属していない定動詞(あるいは定動詞の時制・法要素)に従属文の外から支配されているのと同様である。したがって,'前置詞+補文標識 dat' による従属文では補文導入要素が指定部を欠いており,全体として統語的に前置詞句を形成していることになる。一方,'前置詞+補文標識 't' (例. om't「…だから」)では,前置詞は後続する従属文全体を直接支配しているのではなく,補文導入要素の指定部にあり,そのために dat が 't に縮約されていると言える。つまり,この場合は全体として統語的に従属文を形成している。'副詞+補文標識' による従属文では dat は許されないが(例. *doedat, doe't「…したときに」),それは前置詞とちがって副詞は後続する文成分を直接支配できず,補文導入要素の外に現われることができないためである。関係文('t)や間接疑問文の疑問詞('t)についても同様である。

i）指定部がない場合
前置詞＋[[∅＋dat]-従属文]（副詞節，付加成分；例．omdat「…だから」）
[[∅＋dat]-従属文]＋定動詞（主語・目的語，補足成分）
名詞＋[[∅＋dat]-従属文]（同格節，修飾成分）
ii）指定部がある場合
[[前置詞＋'t]-従属文]（副詞節，付加成分；例．om't「…だから」）
[[副詞＋'t]-従属文]（副詞節，付加成分）
先行詞＋[[指示代名詞＋'t]-従属文]（関係文，修飾成分）
[{疑問詞/of}＋'t]-従属文]]＋定動詞（間接疑問文，補足成分）
名詞＋[{疑問詞/of}＋'t]-従属文]]（同格節，修飾成分）

☞ オランダ語の補文標識には dat はあるが，'t にあたる縮約形はない（同様にオランダ語には西フリジア語の 3 人称単数両性主格形 er や 2 人称親称単数主格 -o/-e に相当する人称代名詞の連接形も存在しない）。したがって，西フリジア語で dat を用いる場合にはオランダ語では dat を用いるが，西フリジア語で 't を用いる場合にはオランダ語では補文標識を欠く。両者の相違は(2)(c)で述べるように，dat が連接形になり得るか（西フリジア語），なり得ないか（オランダ語）による。

フ．dat「…ということ」⇔ オ．dat「同左」
om't，omdat「…だから」⇔ omdat「同左」
doe't「…したとき」⇔ toen「同左」
dy't「関係代名詞単数両性・複数形」⇔ die「同左」
wêrom't「なぜ…かということ」⇔ waarom「同左」

ただし，オランダ語の方言にはこれ以外の場合にも補文標識を用いるものがあり，標準語でもとくに口語では，§ 44 (3)(b)で用例とともに述べたように，上記の場合以外に dat，of を用いることがある。

一方，ドイツ語は西フリジア語の補文標識 dat にあたる daß はあるが，'t にあたる縮約形がない点でオランダ語と共通している。したがって，ドイツ語の補文導入要素は '前置詞＋補文標識' という語形によるものを除いて補文標識を欠いている。しかも，'前置詞＋補文標識' という語形の従属接続詞でさえも補文標識 daß を示すものは少なく，ohne daß「…することなしに」，(an) statt daß「…するかわりに」，außer daß「…することのほかに」，auf daß「…するために（文語的）」などに限られる。そのほかには nachdem「…した後で」，indem「…しながら，…することによって」，seit(dem)「…して以来」のように指示代名詞を直接支配するものがあり，さらに，damit「…するために」のように「r-代名詞」（da-＜dar-）を支配するものがある。

ドイツ語でも方言や方言の影響を受けた口語では，上述の事実とは異なって，標準語の規範では許されない場合に補文標識を用いることがある。次の用例は南部の口語の例である。

南ド．Das ist das Buch, *das wo* mir der Buchhändler empfohlen hat.「これが本屋さんがぼくに勧めてくれた本です」(標準語では wo の使用は不可) (Duden-Grammatik 1995[5]：788)

Ich frage mich, *welches Buch daß ich wählen soll.*「どの本を選ぼうか，ぼくは迷ってしまう」(標準語では daß の使用は不可) (ib. 1357)

北ゲルマン語でも類似した現象が見られる。スウェーデン語の用例を示す。

ス．Jag kan inte se *vem* {*som*/*∅} kommer.「私はだれが来るのかわからない」(vem「だれ (主語)」，som：補文標識)

⇔Han undrade *vem* {**som*/∅} han hade hört det ifrån.「彼はだれからそのことを聞いたのだろうと考えた」(vem「だれ (目的語)」，som：補文標識)

アイスランド語でも場所を示す関係副詞は þar sem という。これは西フリジア語の dêr't に対応する (þar＝dêr；補文標識 sem＝'t)。

このほかに英語の方言にも類例が見られる。古い時代の文献にも同様の現象が観察される。

(c) その他の場合

① 指定部が子音 [t] で終わる場合：'t→∅

[t] の連続を避けるために 't は発音上，吸収されて現われない。

it boek *dat* ik noch net lêzen ha「私がまだ読んだことがない本」(dat←dat＋'t 関係代名詞)

⇔*Dat* ha ik noch net lêzen.「それは私はまだ読んだことがない」(dat 指示代名詞)

De bern boarten op 't strân {*oantdat*/*oant*} it tsjuster wie.「子供たちは暗くなるまで海岸で遊んだ」(oant←oant＋'t 従属接続詞)

② 最終音節にアクセントがない前置詞：'前置詞＋{dat/*'t}'

発音上の理由で 't を用いることができず，dat だけを用いる。

De minsken wurde ferrifele, {*sûnder dat*/**sûnder 't*} se der wat oan dwaan kinne.「人々はそれについて何もできずにだまされてしまう」

(sûnderdat ともつづる) (ULI'S, C 11：6 変更)

③ 機能語以外の直後：*dat, *'t

指定部がふつうの名詞や形容詞など，機能語以外の要素を伴う場合には dat, 't はともに用いない（ただし，(2)(C)①で示すように oft を用いることはできる。oft をかならず用いるという話者もいる)。

de jonge {**dy sy fyts dat*/**dy syn fyts 't*/*dy syn fyts* Ø} stellen wie「(自分の) 自転車を盗まれた少年」(Hoekstra/Tiersma 1994：525 変更)

Ik frege *op* {**hokker krante dat*/**hokker krante 't*/*hokker krante* Ø} se abonnearre wie.「私は彼女がどんな新聞を購読しているのかたずねた」

Ik frege {**hoe'n ding dat*/**hoe'n ding 't*/*hoe'n ding* Ø} it is.「私はそれはどんなものかたずねた」

Wy witte net, {**hoe slim dat*/**hoe slim 't*/*hoe sim* Ø} it is.「私たちはどんなに深刻な状態なのか知らない」

その他の用例。

Men moat witte *út hokker hoeke* de wyn waait.「どの方角から風が吹いているかは知っていなければならない（＝用心するに越したことはない。ことわざ)」(Beintema 1990：61)

Men sjocht oan de fearren wol *wat fûgel* it is.「翼でどんな鳥かはちゃんとわかる」(Bosma-Banning 1981²：139)

Net ien wist krekt *hoe slim* dat wie.「だれもそれがどれほどひどいか知らなかった」(ib. 89)

Fregesto niis krekt, *hoe let* ik moarn yn it sikehûs wêze moast?「明日いつごろ病院に行かなくちゃいけないか，さっき聞いてくれた？」(ULI'S, C 6：28)

一方，次の用例では 't を用いている。これは hoe mear「どれだけより多く」，hoefier「どの程度」全体で 1 語として意識されているためと考えられる。逆に，'t を欠く語形は用いることができない。

Hoe mear 't men de duvel jout, *Hoe mear 't* er ha wol.「悪魔はものをやればやるほど多くほしがる（ことわざ）」(Beintema 1990：30)

Ik wit net yn {*hoefier 't*/**hoefier*} dat kin.「私にはそれがどの程度可能なのかわからない」(Zantema 1985：408 変更)

④ 独立用法の hokker「どんなもの，どれ」，hoe'nen「同左」の直後：*dat，*'t

この 2 語は最終音節にアクセントがなく（②），また，単独で 1 つの文成分として用いる場合，③に準じて空の被修飾名詞が後続するとみなされて 't を用いることができない（ただし，(2)(c)②で示すように oft を用いることはできる。oft をかならず用いるという話者もいる）。

Ik frege *op* {**hokker dat*/**hokker 't*/*hokker* ∅} se abonnearre wie.「私は彼女がどんなものを購読しているのかたずねた」

Ik frege {**hoe'nen dat*/**hoe'nen 't*/*hoe'nen* ∅} it is.「私はそれはどんなものかたずねた」

☞ §44 (3)(b)②の説明と用例を参照。

⑤ 不完全な形式の従属文

次の用例のように，従属文として不完全な形式をとる表現には補文標識をつけない。

Wêrom sa soe men freegje kinne.「どうしてそうなのかと問いたくなるところだ」(Bosma-Banning 1981²：137)

Men soe freegje kinne *wêrom*.「どうしてかと問いたくなるところだ」(ib. 138)

⑥ 語彙的な例外

以上の規則に従わない語彙がいくつかある。§67 (2)の用例を参照。

(2) oft [ɔt]（口語 at [ɔt]）

(a) oft（口語 at）を用いる場合：間接疑問文

従属文が選択疑問文である間接疑問文の場合（(1)(b)⑤）のほかに，従属文が疑問詞疑問文である間接疑問文では，補文標識 't のほかに oft（口語 at）

を用いることができる。

Ik wist net, {*wa't/wa oft*} komme soe.「私はだれが来るのか知らなかった」(Hoekstra/Tiersma 1994：525)

Wy witte net mear, {*hoe't/hoe oft*} it mei him giet.「私たちは彼がどうしているかもう知らない」

Ik wist net, *mei* {*wa't/wa oft*} er juster dûnse hat.「私は彼が昨日だれと踊ったか知らない」

☞ oft はドイツ語の ob，英語の if に対応する。

(b) oft（口語 at）を用いない場合：間接疑問文以外

w- や h- で始まる疑問詞と同じ語形であっても，疑問詞としてはたらいていない場合には oft（口語 at）を用いると非文法的ないし不自然になる。

de jonge {*dy't/*dy oft*} it dwaan wol「それをしたいと思っている少年」

{*Wa't/*Wa oft*} it dwaan wol, moat it betelje.「それをしたいと思う者は支払わなければならない」(Hoekstra 未刊：13 変更)

Sy narre har bruorke, {*wat/*wat oft*} net sa moai fan har wie.「彼女は弟をいじめたが，それは彼女としてあまり良い行ないではなかった」(ib. 13 変更)

{*Wannear't/*Wannear oft*} ik in hjerring yt, wurd ik siik.「ニシンの塩漬を食べると，私はいつも気分が悪くなる」(ib. 14 変更)

de frou, *op* {*wa't/?wa oft*} er stimd hie「彼が投票した女性」(関係文) (ib. 13 変更)

⇔Sy frege, *op* {*wa't/wa oft*} er stimd hie.「彼女は彼がだれに投票したかたずねた」(間接疑問文) (ib. 12 変更)

(c) 従属文の種類にかかわらず oft を用いる場合

間接疑問文か否かにかかわらず，指定部がふつうの名詞や形容詞などの機能語以外の要素を伴う場合や，独立用法の hokker「どんなもの，どれ」，hoe'nen「同左」では補文標識 dat と 't はともに用いることができない ((1)(c)③，④) この場合には oft が唯一可能な補文標識の表示手段になる。oft

を用いない場合には補文標識は一般に削除され，例外的に現われない（ただし，oft をかならず用いるという話者もいる）。つまり，oft は補文標識の実現のためにまったく形式的な手段として用いられている。

① 機能語以外の直後

de jonge {**dy sy fyts dat/*dy syn fyts 't/dy syn fyts oft/dy syn fyts Ø*} stellen wie「（自分の）自転車を盗まれた少年」(Hoekstra/Tiersma 1994：525 変更)

Ik frege *op* {**hokker krante dat/*hokker krante't/hokker krante oft/hokker krante Ø*} se abonnearre wie.「私は彼女がどんな新聞を購読しているのかたずねた」

Ik frege {**hoe'n ding dat/*hoe'n ding't/hoe'n ding oft/hoe'n ding Ø*} it is.「私はそれはどんなものかたずねた」

Wy witte net, {**hoe slim dat/*hoe slim't/hoe slim oft/hoe sim Ø*} it is.「私たちはどんなに深刻な状態なのか知らない」

その他の用例。

Sjoch ris, *hoe'n moaie blom oft* dat is.「ごらん，あれはなんてきれいな花でしょう」(Zantema 1984：700)

Sjoch ris *hoe moai oft* dy blom is.「ごらん，あの花はなんてきれいなんでしょう」(ib. 700)

② 独立用法の hokker「どんなもの，どれ」，hoe'nen「同左」の直後

Ik frege *op* {**hokker dat/*hokker't/hokker oft/hokker Ø*} se abonnearre wie.「私は彼女がどんなものを購読しているのかたずねた」

Ik frege {**hoe'nen dat/*hoe'nen't/hoe'nen oft/hoe'nen Ø*} it is.「私はそれはどんなものかたずねた」

このように，補文標識 dat，'t は補文導入要素の指定部がある場合にこれに義務的に連接し，連接しなければ音形をもつものとして存在できない。①と②はそのような連接を阻む要素が介在している場合であり，oft（←of＋'t ←of＋dat）の介入は補文標識の実現を助ける形式的な手段である。このことから，この場合の補文標識 dat，'t はともに連接形であると言える。dat

が義務的に 't に縮約されるのは，上記の dat がアクセントをもたない場合の規則によると考えられる。't だけでなく，dat も連接形になり得る点に注意。

☞ Hoekstra（未刊：7）は次例の dat も指示代名詞ではなく，アクセントをもつ補文標識（demonstrative complementizer）とみなしている（この dat はなくてもいい）。この場合の dat も連接形だが，アクセントをもつので 't に縮約されない。
"Hja sil trouwe." "Mei *wa dat*?"「彼女，結婚するのよ」「だれと」(Zantema 1984：156)
(1)(b)の注で述べたオランダ語の補文標識との相違は，西フリジア語では dat が連接形になり得るが，オランダ語ではなり得ないと考えることによって説明できる（Hoekstra 未刊：17)。

したがって，oft を欠く場合には人称代名詞連接形は用いない（§ 38 (2), (3))。

Ik frege *op* {*hokker krante Ø hy*/**hokker krante Ø er*} abonnearre wie.「私は彼がどの新聞を購読しているのか尋ねた」

Ik frege *op* {*hokker krante Ø do*/**hokker krante-Ø-sto*} abonnearre wiest.「私は君がどの新聞を購読しているのか尋ねた」

☞ § 44 (3)(b)②の説明と用例を参照。

☞ Hoekstra（未刊：4）は E. Hoekstra（1993）に従って，次のような補文導入要素の構造を想定している。
$[_{WhP}$XP $[_{Wh'}$of $[_{ToP}$YP $[_{To'}$dat [...
(WhP: Wh-Prase, ToP: Topic Phrase)
WhP の指定部 XP には疑問詞が入って間接疑問文をつくり，ToP の指定部 YP には指示詞，副詞・前置詞が入ってそれぞれ関係文，従属接続詞に導かれた従属文をつくる。of は WhP の指定部 XP がある場合には任意に削除され，dat は先行する指定部に義務的に連接する。アクセントをもたない dat は 't に縮約される。
なお，Hoekstra/Tiersma（1994：524 f.)，Hoekstra/Marácz（1989b）では oft を 'of＋'t' に分析しないまま oft 自体を補文標識として認める古い分析がとられている。

(3) as [ɔs]

'sa＋副詞＋'t' という語形の従属接続詞では 't のかわりに as を用いる例が見られる（§ 67 (2)(g) foarsafier't, foarsafier as など「…である限り」, (u) sadree't, sadree as「…するとすぐに」, (v) sagau't, sagau as「同左」, (w) salang't, salang as「…する間, …するかぎり」）。このように, as は dat, 't とならんで補文標識としての機能を部分的に担っていると考えられる。しかし, 用法は一定していない。比較構文や条件節での as については補文標識 't の使用は任意であり, De Rooy (1965：111) によれば, as＋'t の発音は [ɔt] となり, oft (口語 at) と混同されることがある。「(あたかも)…であるように」という意味の用法でも oft と混同されることがある。「…であればあるほど～だ」という比較構文では as 自体の使用が任意である。as dat という語形も見られる。従属文を伴う場合には一般に as を用いず, at を用いるという意見もある。以下では as の 2 つの用法について用例を示す。

☞ Hoekema (1990：74) は教育的な立場から oft の使用は as＋'t との混同からまぎらわしく不要であり, at だけを用いるように提案している。
☞ 上記の現象の歴史的な説明にはいくつかの説が対立している。as, oft, dat/'t の使い分けは一定せず, はっきりした用法の確定は困難である。地域差も大きい。詳細は Van Coetsem (1960), Van der Woude (1960), Hoekema (1961), De Rooy (1965：とくに 110-116, 166-168), Popkema (1979), Hoekema (1990), Van der Meer (1991b) 参照。
☞ as の用法一般は§ 67 (2)(a)参照。

(a) 比較構文 (§ 35 (2)(b))

Wat fierder as it wetter komt, *wat minder sterk* Ø de stream is.「水が遠くに来れば来るほど流れは弱くなる」(ULI'S, B 9：7)

Hoe hurder Ø it reint, *hoe hurder* Ø it eint.「雨は激しく降れば降るほど早く止む（＝失望は一度に重なれば落胆は長続きしなくてすむ。ことわざ)」(Beintema 1990：114)

Wat mear {*as/oft*} de sinne op 'e kjitte skynt, *wat mear* {*as/oft*} se stjonkt.「汚物は日が射せば射すほどそれだけ臭う（＝焼け石に水。こ

とわざ)」(Beintema 1990：76 変更，Zantema 1984：495)

Wy jouwe mear út *as dat* wy fertsjinje en liene dan jild.「私たちは稼ぐよりも多く支出し，そうしてお金を借りる」(ULI'S，C 20：8)

't Is better dat de wein giet *as dat* er stiet.「車は止まっているより動いたほうがいい（＝物事は停滞しているよりもどのようにであれ進行しているほうがいい。ことわざ)」(Beintema 1990：139)

as at という語形も見られる。

Do bist grutter *as at* ik tocht.「君は私が思ったより大きい」(Tiersma 1985：98)

(b) as [ɔs]「もし…ならば，…するときに」

As't pake fiifensantich wurdt, komt de hiele famylje.「祖父が 75 歳になると家族が全員やってくる」(ULI'S，C 19：27)

At ik thús west hie, wie *dit* noait bard.「私が家にいたら，このことはけっして起こらなかっただろうに」(Tiersma 1985：99)

As it dyn heit en mem goed is, trouwe wy.「もしお父さんとお母さんがよければ，私たちは結婚します」(ULI'S，B 1：18)

As men oer de duvel praat, is er ornaris tichteby.「悪魔について話をすると，きまって悪魔はすぐそこにいる（＝噂をすれば影。ことわざ)」(Beintema 1990：30)

(4) 補文標識の活用（§ 38 (5)）

§ 38 (5)で述べたように，補文標識は従属文の主語が 2 人称親称単数の代名詞の場合に義務的に -st の人称変化語尾を伴う。これは定動詞が 2 人称親称単数の変化語尾 -st を伴うのと同様であり（例．do kom-st「君は来る」，do kaam-st「君は来た」)，補文標識が活用するためである。2 人称親称単数の主語代名詞は連接形 -o/-e（←-do/-de）として -st の直後に付加されるが，変化語尾 -st によって主語が 2 人称親称単数であることが明らかなために省略できる（§ 38 (4)）。

したがって，この場合，西フリジア語の補文導入要素は次のような付加要

素を含む複雑な構造を示すことになる。

指定部＋補文標識 dat/'t＋変化語尾 -st（＋人称代名詞連接形 -o/-e）

(a) 従属接続詞

Untklaai dy net *earst* op bêd giest.「寝床に入るまえに着物を脱ぐな（＝死ぬとわかるまでは財産を手放すな。ことわざ）」(earst←ear-'t-st-∅)（Beintema 1990：137）

Ik hie net tocht, *datsto* skilderje koest.「私は君に絵がかけるとは思ってもみなかった」(datsto←dat-st-o)（ULI'S，B 19：26 変更）

(b) 間接疑問文の疑問詞

Witst wol *hoest* mei dat apparaat moatste?「その器械はどうやったらいいか知っていますか」(hoest←hoe-'t-st-∅)（Zantema 1984：1198）

Net te witten *ofst* him ea wer sjochste.「君が彼にまた会えるかは定かでない」(ofst←of-'t-st-∅)（Zantema 1984：1198）

(c) 関係詞

Hjir is de list fan de boeken *dy 'tste* fergees tastjoerd krije kinst.「ここに君が無料で郵送してもらえる本のリストがあります」(dy 'tste←dy-'t-st-e)

Krûp net yn in gat *dêrst* net wer út komme kinst.「(そこから) 再び外へ出てこられないような穴へはもぐるな（＝自分の能力以上の企てはやめておけ。ことわざ）」(dêrst←dêr-'t-st-∅)（Beintema 1990：49）

§67 従属接続詞 (it ûnderskikkend bynwurd)

(1) 用法と枠構造

(a) 用法

統語的に同等でない文や文成分を結びつけ，主文や従属文の文成分となる従属文を導く接続詞を従属接続詞という。従属接続詞に導かれた従属文の語順は主文とは異なって定動詞が文末に置かれ，従属接続詞とともにいわゆる「枠構造」（ド．Satzklammer）をつくる。

従属接続詞が定動詞とともに枠構造をつくるのは，補文標識が定動詞の現

われるべき位置（定形第2位）を占めているために，定動詞がその位置を奪われているためである。主文では補文標識がないので，定動詞は主文の2番目の位置（定形第2位）に現われることができ，受動態（wurdt...過去分詞），完了形（{hat/is}...過去分詞），話法の助動詞（kin...不定詞「…できる」），分離動詞（komt... oan「到着する」）などの場合にも同様に枠構造が形成される。このように，従属文を導く補文標識と主文の定動詞が現われる位置は同じ位置であり，両者は次の点で共通した特徴を示す。

i）人称代名詞連接形（3人称単数男性主格 er，2人称親称単数主格 -o/-e (←-do/-de)）がその直後にかぎって付加される。

ii）2人称親称単数主格の変化語尾 -st を義務的に伴う。

iii）der（Ⅷ）や人称代名詞などのアクセントをもたない短い機能語が連接形のようにその直後に置かれる傾向がある。

従属接続詞に導かれた従属文はひとつの文成分であるから，前域を占めるとその直後に定動詞が続く。

Doe wie de arke klear.「すると箱舟ができあがった」

Doe't de arke klear *wie, sei* God: "Gean yn 'e arke!「方舟ができあがると神は言われた『方舟の中に入りなさい』」

En *doe die* God de doar fan 'e arke ticht.「そして，そのとき神は方舟の扉をお閉めになった」（以上 De Arke fan Noach 変更）

☞ したがって，西フリジア語では英語とちがって，平叙文の主文で主語が定動詞につねに先行するということはない。この点は英語を除くすべてのゲルマン語に共通しており，英語だけが特異である。

次の3つの従属接続詞は古風で文語的な用法として例外的に並列接続詞としても用いる（Dyk/Hoekstra 1987：12）。(2)(h) (al)hoewol't「…であるにもかかわらず」，(1) mits，mitsdat「…という条件ならば」，(s) om't，omdat「…だから」。また，(3)で述べる従属文と伴う dat と主文を伴う dat の用法には注意を要する（用例はそれぞれ後出）。

(b) 枠構造

ここで枠構造についてまとめておく。従属接続詞の位置あるいは主文の定

動詞の占める「定形第2位」(ド. Verb-Zweitstellung) の位置を「左枠」(ド. linke Klammer), 文末の動詞成分あるいは分離動詞の前綴りのように動詞と密接に関連する要素の占める位置を「右枠」(ド. rechte Klammer) という。命令文や直接選択疑問文は前域を欠くので, 定動詞は「定形第1位」(ド. Verb-Erststellung) となる。「左枠」すなわち主文の定動詞の直前の位置を「前域」(ド. Vorfeld) という。並列接続詞は「前域」よりもさらに前に置かれる。「左枠」と「右枠」の両者にはさまれた位置を「中域」(ド. Mittelfeld) という。「右枠」よりも後ろの位置を「後域」(ド. Nachfeld) といい, 外置によって「枠外配置」(ド. Ausklammerung) された補文 (従属文や不定詞句) や前置詞句などが枠外に取り出されたときの位置を指す。

☞ 枠構造はドイツ語とオランダ語にもあり, 英語を除くいわゆる西ゲルマン語に共通の特徴である。ただし, 右枠の動詞群 (ド. Verbalgruppe) 内部の語順は3言語のあいだでかなり異なっており, 方言でも大きな多様性が見られる。歴史的な変化も観察される。

上記の用例を当てはめれば, 次のようになる。

〈前域〉	〈左枠〉	〈中域〉	〈右枠〉	〈後域〉
Doe	wie	de arke klear.		
	Doe't	de arke klear	wie,	
[Doe't de arke klear wie,]	sei	God:		["Gean yn 'e arke!"]
	(hat	God	sein:	["Gean yn 'e arke!"])
	"Gean	yn 'e arke!"		
En doe	die	[God de doar fan 'e arke]	ticht.	

(c) 枠構造と語順

枠構造に関連していくつか語順についての注意点を以下に示す。

① 従属接続詞を欠く従属文

従属文には条件や譲歩を表わす文, あるいは発言の引用文のように, 従属接続詞を欠くものがある (ド. uneingeleiteter Nebensatz)。この場合, 定動詞は左枠の位置に置かれ, 選択疑問文と同じ語順をとる。

Dochst minsken goed, dan krigest drek, *dochst* bargen goed, dan krigest spek.「人に良くしてやればごみをもらうだけだが，豚に良くしてやれば脂身が手に入る（ことわざ）」(Beintema 1990：52)

Elk moat gapje, *sil* er bite.「噛みたければ，だれでも口を大きく開けなければならない（何かを手に入れるためには努力が必要だ。ことわざ）」(Beintema 1990：48)

② 副詞・代名詞の介入

前域を占める従属文は，それを受けて照応的な役割を果たす副詞や代名詞を介して主文につなげられることがある。定動詞はその後に続く。

As de grutten mei jin dien hawwe, dan kenne se jin net mear.「お偉方は用がすめば人のことをすぐに忘れる（ことわざ）」(Beintema 1990：55)

Dêr 't de dyk it leechst is, dêr rint it wetter it gaust oer.「道がもっとも低いところでは水がもっとも早くあふれる（＝災害は貧民にもっとも大きな被害をもたらす。ことわざ）」(Beintema 1990：31)

Altyd mei 't ryk op 'e dyk dat hâld net lyk.「いつも富をひけらかしていると，いつかそれは破綻する（ことわざ）」(Beintema 1990：31)

③ 譲歩文

譲歩文は条件節に '疑問詞...ek', al, noch sa などの語句を伴うことが多い。譲歩文では条件節に相当する従属文の直後に主文の定動詞が後続しないことがある。この場合，条件節に相当する従属文は前域を占めていないことになる。

Hoe 't er it ek besocht, it *wie* om 'e nocht.「彼がどう試みても，それはむだだった」(Visser 1985：723)

Wat it regear ek docht, it *is* altyd wurkleazens, dat der út fuortkomt.「政府が何をしても，その結果として生じるのはいつも失業だ」(ULI'S，C 20：3 変更)

Hoe 't ús mem it ek besocht, sy *koe* de tekening mar net lykje litte.「どうやってみても，母は絵をそっくりに描くことができなかった」

(ULI'S, B 19：26)

一般に譲歩文では主文と従属文の独立性が意味的にも統語的にも強い。条件節が主文の場合もある。

Al hiest wjukken, dan wiest noch te swier.「翼があったとしても，君はまだ重すぎるね」(ULI'S, C 3：17)

主文と主文が並列接続詞や②の照応的な役割を果たす副詞や代名詞を介さずに並列されて，譲歩文を形成することもある。

Al kaam er let, hy kaam dochs.「なるほど彼は遅く来たけれども，来ることは来たのだ」(Visser 1985：38)

Ien kin in frjemde taal noch sa goed leare, syn aksint ferriedt him eins altiten.「外国語はいくら上達しても，なまりが出て母語使用者ではないとわかってしまう」(Breuker et al. 1992²：17)

④ '従属文＋従属文' (§ 35 (2)(b)④)

'{wat/hoe}＋比較級＋従属文，{wat/hoe}＋比較級＋従属文' の形式で「…であればあるほど…だ」という意味を表わす。これはふたつの文成分の並列であり，全体でひとつの文を形成しているのではない。

Wat men *heger* fljocht, *wat* men *leger* saait.「人は高く飛べば飛ぶほど低く落ちる（ことわざ）」(副詞句の並列) (Beintema 1990：41)

不定関係詞を含む関係文が並列する場合も同様である。

Dy 't heech kliuwt, *dy 't* leech falt.「高くのぼる者は低く落ちる（＝高くのぼる者，それすなわち低く落ちる者。ことわざ)」(名詞句の並列) (Beintema 1990：58)

⑤ 発言の引用文

発言の引用文もひとつの文成分となり，前域を占めると直後に定動詞が続く。

"*Do bist siik,*" *sei* syn frou.「『あなたは病気なのよ』と彼の妻は言った」(ULI'S, A 6：8)

"*Wy moatte dat hûs earst mar ris sjen,*" *sei* heit.「『まずは一度その家を見てみなくちゃならん』と父は言った」(ULI'S, A 2：14)

⑥ 話者のコメントを表わす語句

後続する文の内容にたいする話者のコメントを補足的に表現することわり書きの語句は，前域よりもさらに前に置かれることがある。

Koartsein, der *komt* by sa'n wichtige saak nochal wat tinkwurk oan te pas.「要するに，そのような重大な事柄にさいしては，よく考えたほうがいいということだ」(ULI'S，A 13：12)

Fansels it hûs *hie* styl en it kin jin begrutsje om de âlde gevel.「もちろん，その家は趣のある様式で建てられており，(取り壊すことになったら) 古い切妻屋根が惜しまれよう」(Bosma-Banning 1981²：74)

Ommers it hillige *smyt* men net yn it moeras en men wâdet der net straffeleas oerhinne.「というのは当然のことながら，聖なるものを沼に放り投げて，罰を受けずに渡りきることはないからである」(Bosma-Banning 1981²：138)

⑦ 枠外配置

補文以外の枠外配置の用例をいくつか以下に示す。従属文の用例は(3)(a)，不定詞句の用例は§ 37 (4)(d)④と不定詞の章を参照。目的語として用いた従属文では枠外配置が義務的であることについては(3)(a)②を参照。

i) 前置詞句

No skriuwe de dokters yn ús lân sa'n 3500 medisinen foar *oan harren pasjinten*.「今では私たちの国の医者は患者に約3,500の医薬品を処方している」(ULI'S，C 11：1)

Yn in protte gemeenten dy't neffens de plannen ferdwine moatte, wurdt aksje fierd *foar behâld*.「それらの計画によって消滅を余儀なくされる自治体の多くでは保存のための運動が繰り広げられている」(ULI'S，C 8：7)

Dy't mei de dochter trouwe wol, moat frije *mei de mem*.「娘を嫁にもらおうとする者は，母親とねんごろにならなければならない（ことわざ)」(Beintema 1990：46)

ii) 副詞

Ik hoopje dat it gau went. Want ik ha wat ôfdreamd *de lêste wiken*.「早く軌道に乗ってほしいと私は願っている。というのは，最近の数週間，何かと夢にうなされたからだ」(ULI'S, *A* 13：8)

iii) 長い名詞句

Der wurdt tsjintwurdich oannommen dat út dat Noardseegermaansk ûntstien is *it Frysk, Ingelsk en miskien ek it Aldsaksysk*.「現在では，その北海ゲルマン語からフリジア語，英語，そしておそらく古ザクセン語が成立したと考えられている」(Boersma/Van der Woude 1980²：8)

(2) 種類と用例

'前置詞＋dat' の語形をもつ従属接続詞のアクセントは，前置詞と dat の両方にあるが，dat がとくに強く発音されることが多いために，辞書などでは dat だけにアクセントを示している場合が多い。しかし，じっさいには前置詞または dat のいずれか，または両方にアクセントを置くことが可能である。本書では前置詞と dat の両方にアクセントを示す。前置詞と dat は1語としてつづるが，2音節以上の前置詞では2語としてつづる用例も見られる。

☞ アクセントとその表記にかんしてはオランダ語も同様である。Paardekooper (1987²) の発音辞典は前置詞と dat の両方にアクセントを示している。

☞ alhoewol't は (h) (al)hoewol't で扱う。

(a) as [ɔs]

従属文だけでなく，その他の文成分を伴うことがある。as't ならびに口語では at も用いる。用例は§ 66 (3)参照。

☞ 西フリジア語の as はドイツ語の als, wie, wenn を含む広い範囲で用い，用法が多岐にわたっている。

① 「もし…ならば，…するときに」

As it tij ferrint, streamt it wetter werom.「干潮になると水が引く」(ULI'S, B 9：7 変更)

Mem, *as* ik deagean, wêr kom ik dan?「おかあさん，死んでしまったらぼくはどこへ行くの」(ULI'S，B 20：10)

De bern moatte noadich wat nije klean ha, *as* it my net mist.「私の思い違いでなければ，子供たちは何か新しい服が必要よ」(ULI'S，A 4：8 変更)

Ik wit net mear hoe't it moat. *Ast* dat mar witste!「ぼくはもうどうしからいいかわからない。もし君にわかればなあ」(ast は補文標識の活用による語形。§ 38 (5)，§ 66 (4)) (Zantema 1984：1198)

☞ (γ) wannear't も類似した意味を表わす。(c) doe 't との相違に注意。

② 「…のように」

従属文以外の文成分を伴うことがある。形容詞の同等比較の表現としても用いる。④と違って，不定の意味の名詞には不定冠詞をつけることが多い。krekt「まさに」などの程度を強める副詞が先行することもある。

Do sliepst dêr *as in roas*, seit se tsjin har dochter.「おまえはそこで薔薇のように眠っているね，と彼女は娘に言った」(ULI'S，A 2：14)

Pake woe it noch *krekt as* eartiids ha.「祖父はまったく昔どおりにしたがった」(ULI'S，B 1：9)

形容詞の同等比較 (§ 35 (2)(a)) の表現で用いることも多い。

Op feestjes wurdt meastal bier dronken, troch froulju *krekt sa goed as* manlju.「祝いの席ではたいていビールを飲むのさ。男とまったく同じように女もね (原文は受動態)」(Bangma 1993^2：9)

sa'n moaien(ien), ast(o) noch nea sjoen hast「君が一度も見たことがないようなすばらしいもの」(ULI'S，B 19：24)

☞ (j) lykas も同様の意味を表わす。

③ 「(あたかも)…であるように」

krekt「まさに」などの程度を強める副詞が先行することもある。

It wie *krekt as* er net doarst.「彼にはまったくその勇気がないかのようだった」(Zantema 1984：40)

at を用いることもある。

It liket *at* it reine soe.「雨が降りそうだ」

☞ この場合の at は 'as+'t' と考えられる（De Rooy 1965：111）。
as に at が後続することもあるが，この場合の at は oft と考えられる。
It wie *krekt as at* se oerein gean soe.「彼女はまさに起き上がろうとしているようだった」（Tiersma 1985：98）

☞ as を副詞として前域に置き，定動詞が後続する用法もある（§ 52 (2)(a)①）。
Se docht *krekt as sjocht* se my net.「彼女は私を見ていないふりをしている」（Bangma 1993²：11 変更）
It wie *krekt as soe* se oerein gean.「彼女はまさに起き上がろうとしているようだった」（Tiersma 1985：98）
It liket *as soe* it reine.「雨が降りそうだ」（ULI'S，B 1：18）

☞ of，oft にも同様の用法がある（§ 52 (2)(a)②，§ 67 (2)(r)②）。

☞ ドイツ語の 'als+主文'「あたかも…のように」と 'als ob+従属文'「同左」，オランダ語の 'als+主文「同左」と '{alsof/of}+従属文'「同左」を参照。
なお，次の西フリジア語とオランダ語の用例に注意。
フ．Hy is sa dom of hy docht *sabeare*.「彼はよほど愚かであるか，わざとそうしているかのどちらかだ」（ULI'S，B 1：18）
オ．Hij is zo dom of hij doet *alsof*.「同上」（ULI'S，B 1：18）

④「…として」

従属文以外の文成分を伴う。②と違って，修飾成分を伴わない不定の名詞には不定冠詞をつけないことが多い。

As jonge koest ek wol aardich tekenje en skilderje.「子供のときから君はもうけっこううまく絵がかけたじゃないか」（ULI'S，A 19：8）

As bern mochten wy oeral mei boartsje.「子供の頃，私たちは何を相手に遊んでもよかった」（Bosma-Banning 1981²：137 変更）

Fryslân stiet fan âlds bekend *as boerelân*.「フリースラントは昔から農民の地として知られている」（ULI'S，B 9：13）

⑤「…よりも」

形容詞の比較級（§ 35 (2)(b)）による表現で用いる。

Ik haw no al *mear as* in oere op 'e dochter wachte.「私はもう 1 時間

も医者を待たされた」(ULI'S, B 6：8)

De âlden fan Doetsje Sjoukje waarden net *âlder as* 35 en 36.「ドゥチェ=シャウキエの両親はそれぞれ35歳，36歳を過ぎないまま亡くなった」(ULI'S, B 1：9)

Noch altiten gongen der *mear* minsken mei de honger yn 'e hals op bêd *as* mei it liif fol.「まだもっぱら人々は満腹でよりも空腹のまま床に就くことのほうが多かった」(ULI'S, B 3：12)

It praat fan 'e bern is *mear* Hollânsk *as* Frysk.「子供たちの話す言葉はフリジア語よりもオランダ語のことが多い（Hollânsk は Nederlânsk に比べてフリジア語との対比を意識した表現）」(ULI'S, B 8：15 変更)

⑥「…すればするほど～だ」

用例は§ 66 (3)(a), § 35 (2)(b)③参照。

(b) behalve(n) dat [bəhɔ́lvə(n)dɔ̀t]「…であることを除いて，…であることのほかに」

Behalven dat de wurdgroepen in syntaktyske ienheid blike te wêzen, hawwe se ek as eigenskip, dat se sinswearde hawwe.「それらの語群はこのように統語論的な単位であるらしいことのほかに，文としての価値をもつという性質を備えている」(Boersma/Van der Woude 1980²：62)

☞ *behalve(n)'t という語形はないことに注意。

☞ (β) útsein dat も同様の意味で用いる。

(c) doe't [dut]「…したときに」

過去の1回限りのできごとについて用いる。

Doe't it krysttiid wie, seach it berntsje mei grutte eagen nei de krystbeam.「クリスマスになると，その子は目を丸くしてクリスマスツリーを見つめた」(ULI'S, A 20：13)

Gabe wie wiet, *doe't* er yn 'e sleat foel.「ガーベは溝に落ちたときにずぶ濡れになった」(ULI'S, A 19：18)

Doe't de ierapels rûnom gewoane kost waarden, kamen ek de foar-

ken yn gebrûk.「じゃがいもが広く一般的な食べ物になると，フォークが使われはじめた」(ULI'S，B 3：17)

☞ doe't は時間を表わす関係副詞として用いる (§ 45 (3)(e))。

☞ doe't はオランダ語の toen，ドイツ語の als に対応する。(α)① as「もし…ならば，…するときに」または (γ) wannear't「もし…ならば，…するときに」に対応するのは，オランダ語では als または wanneer，ドイツ語では wenn である。

(d) ear't [jɛt]，eardat [jɛ́dɔ́t]「…する前に；…でないかぎり（＋否定)」

Meastentiids ferrint der in protte tiid, *ear't* soks bliken docht.「そのようなことが判明する前に，たいてい長い時間がたってしまう」(ULI'S，B 9：7)

Dan kinne wy de oarsaken opsykje en weinimme *ear't* it te let is.「そうすれば私たちは手遅れになる前に原因をつきとめ，除去することができる」(ULI'S，B 9：8)

It moat earst op 't slimst *ear't* it betteret.「良くなる前には，まず最悪にならなければならない（＝弊害は最悪な状況にならないと除去されない。ことわざ)」(Beintema 1990：125)

Ear't ik har *net* fyn, kom ik net werom.「彼女を見つけるまでは（＝彼女を見つけないかぎり）私は戻らない」(Zantema 1984：216 変更)

☞ eardat という dat を用いた例外的な語形に注意 (ear は本来，副詞)。これは (f) foar't，foardat「…する前に」との類推によると考えられる (foar は「…の前に」という意味の前置詞)。オランダ語にも eerdat「同上」という語形はあるが，稀にしか用いず，ふつうは eer「同左」を使う。

☞ (f) foar't，foardat も同様の意味を表わす。
{*Foar't/Ear't*} er mei batikken begûn, joech er him op foar in pear lessen.「バチック染め（ジャワのろう染め）を始めるまえに，彼は何回か講習を受けたいと申し出た」(ULI'S，B 19：26)
{*Ear't/Foar't*} ik har *net* fyn, kom ik net werom.「彼女を見つけるまでは私は戻らない」

(e) fan't [fɔnt]，fandat [fɔ́ndɔ́t]「…のときから」

{*Fan't/Fandat*} se dêryn kaam, hat se gjin wurd sein.「中に入ってき

たときから彼女は一言も口をきかなかった」(Hoekstra 未刊：15 変更)

(f) foar't [fwat], foardat [fwádɔ̀t]「…する前に；…でないかぎり（＋否定)」

Foar 't er op healwei wie, waard er fertrape.「半分も行かないうちに彼は踏みつけられた」(ULI'S, B 20：6 変更)

Lês dat formulier *foar 't* jo begjinne te skriuwen.「書きはじめる前にその書式に目を通しなさい」(ULI'S, C 10：11)

Trije jonges hongen wat om by de nije skoalle in healoerke *foardat* it gebou iepene wurde soe.「男の子が 3 人，新しい学校のところで門が開く 30 分ほど前からたむろしていた」(Bosma-Banning 1981²：129 変更)

☞ オランダ語でも voor, voordat「…する前に」のように dat を欠く語形がある。

☞ (d) ear't, eardat との類似に注意。

(g) foarsafier't [fwasafíət], foarsafier as; ynsafier't [in..], ynsafier as; safier't, safier as「…するかぎり」

It âldste Fryske boek-yn-druk is *foarsafier 't* wy witte: 'Thet Freeske Landriucht'.「私たちの知る限りもっとも古いフリジア語の印刷本は『フリースラント法典』です」(Boersma/Van der Woude 1981²：13)

foarsafier as ik wit「私の知る限り」(Zantema 1984：301)

Ynsafier 't er der tiid foar fine kin, sil er dy helpe.「時間が見つかるかぎり，彼は君に手助けするだろう」(ib. 444 変更)

Safier 't wy witte, is it noch net betelle.「私たちが知るかぎり，それはまだ支払われていない」(ib. 840 変更)

(h) (al)hoewol't [(ɔl)huvôlt]「…であるにもかかわらず」

It famke by de bakker ferstiet him net, *hoewol 't* se like Frysk is as hy.「パン屋の売り子は，彼と同じようにフリジア人でにもかかわらず，彼の言うことがわからない」(ULI'S, C 3：17 変更)

Op skoalle is Nier foarsitter fan de floriaferiening, *hoewol 't* er gjin

geranium fan in begonia ûnderskiede kin.「ニエルはジェラニウムをベゴニアと区別できないにもかかわらず，学校では園芸クラブの部長です」(ULI'S，B 20：8 変更)

Hoewol't it Frysk en it Hollânsk oaninoar besibbe binne, leveret in oersetting fakernôch de nedige swierrichheden op.「フリジア語とオランダ語はたがいに親縁関係にあるにもかかわらず，翻訳のさいには必然的な困難を呈することがかなり多い」(ULI'S，B 16：18)

alhoewol't では対比の意味がさらに強まる。

It moast der sa smoarch yn 'e hûs wêze, ornearren de minsken, *alhoewol't* net ien krekt wist hoe slim dat wie.「どんなにひどいのかだれもまったく知らなかったというのに，人々は家の中はさぞ不潔なのだろうと勘ぐっていた」(Bosma-Banning 1981²：89)

並列接続詞として用いることがあるが，古風で文語的な用法である ((1)(a))。

Wy geane der mar hinne, *hoewol't* wy der gjin nocht oan *ha*.「私たちは乗り気がしないが，そこへ行くことにする」(Fokkema 1967²：76 変更)

Wy geane der mar hinne, *hoewol't* wy *ha* der gjin nocht oan.「同上」(ib. 76 変更)

(i) ynpleats dat [implĺətsdɔ́t]，ynstee dat [iⁿstē:dɔ́t]「…するかわりに」

Ynpleats dat er my efkes freget「彼は私にたずねるかわりに」(Bosma-Banning 1981²：77)

Ynstee dat er tenei earder komt「彼は以後，早く来るかわりに」(Zantema 1984：447 変更)

☞ *ynpleats't, *ynstee't という語形はないことに注意。
☞ オランダ語でも in plaats dat のように dat を用いる。
☞ ynsafier't，ynsafier as は (g) foarsafier't，foarsafier as （など）で扱う。

(j) lykas [líkɔs]「…であるのと同様に」

It bart *lykas* ik sein ha.「私が言ったようになる」(ULI'S，B 19：19)

従属文以外の文成分を伴うこともある。

Ik wol net *lykas* jimme.「ぼくは君たちと同じように気が乗らない」(Zantema 1984：573 変更)

反対の意味の表現には oars [oəs] as「…と違って」を用いる。

Om 1878 hinne gie dat *gâns oars as* hjoeddedei.「1878 年頃は今日とはまったく違っていた」(ULI'S, C 20：2)

lykas は 'lyk＋as' に由来し，従属文以外の文成分を伴う場合には (a) as ②「…のように」と同様の意味になるが，従属文を伴う場合には (a) as ③「(あたかも)…であるように」とは意味が異なる。

☞ ドイツ語では (a) as ③「(あたかも)…であるように」には als (ob) が対応し，lykas ないし sa't (従属文のみ)「…(であるの) と同様に」には wie が対応する。オランダ語では als of と zoals，英語では as if と as ないし like がそれぞれ対応し，西フリジア語と同様にドイツ語の wie に相当する語形を欠いている。

☞ (x) sa't も同様の意味を表わす。

It bart {*lykas*/*sa't*} ik sein ha.「私が言ったようになる」(ULI'S, B 19：19)

しかし，sa't は従属文以外の文成分を伴わない。

Ik wol net {*lykas*/**sa't*} jimme.「ぼくは君たちと同じように気が乗らない」

(k) mei't [mait, mɛit], meidat [máidɔ́t, mɛ́i..]「…だから；…と同時に」

Mei't elkenien belang hat by it Waad, wurdt it in tige gefoelich ûnderwerp as der oer praat wurde moat.「だれもがヴァート地帯 (オランダ北部沿岸の干潟地帯) に関心をもっているので，そのことが話題にならざるを得ないとなるとたいへんデリケートなテーマになる」(ULI'S, B 11：17 変更)

Meidat ik thús kaam, begûn it te reinen.「私が帰宅するや否や雨が降りだした」(Hoekstra 未刊：15 変更)

(l) mits [mIts], mitsdat [mĺdzdɔ́t]「…という条件ならば」

Ik wol wol, *mits* hy ek *meidocht*.「彼がいっしょにやるということなら

私はやってもいい」(Fokkema 1967²：76)

並列接続詞として用いることがあるが，古風で文語的な用法である ((1)(a))。

Ik wol wol, *mits* hy *docht* ek *mei*.「同上」(Zantema 1985：621)

(m) navenant dat [na(:)vənɔ́ntdɔ̀t]「…に応じて，…につれて」

De oerienkomst tusken it Frysk en it Ingelsk wurdt grutter, *navenant dat* de skreaune teksten âlder binne.「フリジア語と英語の共通点は書かれた文献が古くなるにつれて多くなる」(Boersma/Van der Woude 1981²：8 変更)

☞ navenant はオランダ語の navenant と同様に「…に応じて」という意味の副詞であり，従属接続詞としては dat を伴う点に注意。

(n) nei't [nait, nɛit], neidat [náidɔ̀t, nɛ́i..]「…したあとで；…に従って」

Neidat er koarte tiid as dokter yn Purmerein stien hie, sette er him nei wenjen yn syn berteplak.「プルメラインで医者として短い期間務めた後，彼は生まれ故郷に居を定めた」(Stienstra 1982：56)

Nei't de man is, is syn krêft.「人の力量はその人に応じて決まっている(ことわざ)」(Beintema 1990：80)

Jo moatte tarre, *nei't* jo barre.「支出は収入に応じてなすべし(ことわざ)」(Beintema 1990：131)

☞ オランダ語では「…したあとで」という意味には nadat (前置詞 na) を用い，「…に従って」という意味には naar, naargelang (hoe/dat) (前置詞 naar) を用いることに注意。

(o) nettsjinsteande (dat) [nɛ́tʃɪⁿstɪəndə(dɔ̀t)]「…であるにもかかわらず」

Nettsjinsteande {*Ø*/*dat*} er net leard hie, wist er der in soad fan.「習っていなかったにもかかわらず，彼はそれについてたくさん知っていた」(Zantema 1984：650)

☞ *nettsjinsteande't という語形はないことに注意。

(p) no't [no:t]「…である今，…なのだから」

Hy wol net langer, *no't* it reint.「雨が降っているので，彼はこれ以上やる気がない」(ULI'S，B 19：19)

Hoe is 't Timmen jonge, ferfeelst' dy ek *no'st* A.O.W.-er bist?「どうだい調子は，ティメンや。年金生活者になって今，退屈しないか」(no'st←no-'t-st) (ULI'S, A 19：7)

Ik bin altyd by 't ferstân rekke, sei de boer, doe't ik jong wie, siet it yn 'e âlderdom en *no't* ik âld bin, sit it by de jeugd.「『おれには分別というものがあったためしがない』と農夫は言った。『若いころは（分別は）年寄りにあったし，年をとってからは若い者にある』」(Beintema 1990：38)

(q) oant [oənt]，oantdat [ôəndôt]「…するまで」

De bern boarten op 't strân *oant* it tsjuster wie.「子供たちは暗くなるまで海岸で遊んだ」

Jo wachten *oant* de boargemaster útsprutsen wie.「あなたは市長さんが話しおわるまで待っていた」(ULI'S，C 8：5)

Wachtsje {*oant*/*oantdat*} ik klear bin.「私が準備ができるまで待っていなさい」

☞ oant←oant＋'t (§ 66 (1)(c))

(r) oft [ɔt] (口語 at [ɔt])

① 「…かどうか」

Hy frege har *oft* it wier wie.「彼は彼女にそれが本当かどうかたずねた」(ULI'S，B 1：18)

Oft it holp, wist er net.「それが役に立つか，彼にはわからなかった」(ULI'S，B 1：18)

It kin him net skele, *oft* it begjint te neinen.「雨が降りだすかどうかは彼はかまわない」(ULI'S，B 1：25)

Wy dogge dochs oan de moade mei, *oft* wy wolle of net.「私たちは望もうが望むまいが，流行にかかわっているのだ」(ULI'S，C 4：9)

De twifel *oft* ik myn wurk goed die, hat my slim pleage.「仕事がうま

くできたかという疑念に私はひどくさいなまれた」(ULI'S, B 20：6)

Oft it stikken giet?—Wolnee.「もしかして故障するのではないだろうかーいや，そんなことはない」(ULI'S, A 12：8)

② 「(あたかも)…であるように」

It liket *oft* der neat bard is.「何事も起こらなかったかのようだ」(ULI'S, B 10：13 変更)

Doe't ik dy hân yn mines fielde, wie 't *oft* my in ammerfol kâld wetter by de nekke yn smiten waard.「その手を自分の手に取って触れてみると，私はまるで冷たい水をバケツ一杯，首筋に注がれるような気がした」(ULI'S, B 1：12 変更)

Ik freegje my ôf *at* soks wol goed giet.「私はそんなことがうまく行くのかと自問した」(Tiersma 1985：99)

☞「(あたかも)…であるように」という意味は副詞 of を前域に置いて表わすこともできる (§ 52 (2)(a)②)。

It liket wol *of* wit er dat noch net krekt.「彼はそのことをまだよく知らないようだ」(副詞) (ULI'S, B 6：8 変更)

⇔ It liket wol *oft* er dat noch net krekt wit.「同上」

このことは oft が副詞 of と補文標識 't (←dat) から成ることを示している。

☞ (a) as ③にも同様の用法がある。

(s) om't [omt], omdat [ɔ́mdɔ̀t]「…だから」

Hjir kinne wy ek fier it lân oer sjen, *om't* it sa flak is.「土地が平らなので，私たちはここではずっと遠くまで見わたせる」(ULI'S, C 9：12)

Om't wy yn in twatalige provinsje wenje, sprekt it fansels dat beide talen ynfloed op elkoar ha.「私たちは 2 言語使用地域に住んでいるので，両方の言語がたがいに影響し合うのは当然のことです」(ULI'S, B 13：12)

Ik ha honger, *omdat* ik hurd wurkje「私はたくさん仕事をするので，おなかがすきます」(ULI'S, A 19：18)

並列接続詞として用いることもあるが，古風で文語的な用法である ((1)

(a), Boersma/Van der Woude 1980²：87)。

Ik doch net langer, *om 't* ik *ha* skjin myn nocht.「私はもうこれ以上はやらない。すっかり飽きてしまったからだ」(ib. 87)

(t) sadat [sɑ́dɔ̀t]「その結果…」; (sa) dat「…するために」

① sadat「その結果…」

Guon skoallen bringe it tempo omheech, *sadat* de oanslutting slimmer wurdt.「なかには進度を速める学校があるので接続がむずかしくなる」(ULI'S, B 13：8 変更)

As fabryk A in nij middel fynt, freget it der patint op oan, *sadat* oare fabriken dat middel samar net neimeitsje kinne.「製造所Aが新薬を開発すると，他の製造所がそのまま真似できないように特許を申請する」(ULI'S, C 6：9)

Elk wurd hat wol syn funksje yn de sin, mar de measten hawwe in nauwere, eigen relaasje mei ien of mear oare wurden yn de sin, *sadat* in sin ornaris yn groepen te ferdielen falt.「どの語にも文中での役割があるが，大多数の語は文中のひとつないし複数の他の語とのあいだにより緊密な固有の関係をもっているので，その結果としてふつう文はいくつかの部分に分けられる」(Boersma/Van der Woude 1980²：62)

② (sa) dat「…するために」

Meitsje sinnen mei ûndersteande wurden *(sa) dat* de betsjutting goed útkomt.「意味がうまくとおるように，下記の語を用いて文を作りなさい」(ULI'S, C 16：32 変更)

Meitsje notysjes, *(sa) dat* jo de haadsaken fêsthâlde.「大事な点を把握するためにメモをとりなさい」(ULI'S, C 7：21 変更)

(u) sadree't [sadré:t], sadree as「…するとすぐに」

Sadree't it begjint te winterjen, wurdt der praat oer dizze Fryske iismaraton.「冬に入るとフリースラントのこの長距離スケート競技のことが話題になる」(ULI'S, B 5：7 変更)

Hy hearde it al, *sadree as* hy de klompen útklapte.「彼は木靴を脱い

だとたんにそれが聞こえた」(Bosma-Banning 1981²：109 変更)

☞ (v) sagau't, sagau as も同様の意味を表わす。

☞ safier't, safier as は (g) foarsafier't, foarsafier as (など) で扱う。

(v) sagau't [sagɔ́ut], sagau as「…するとすぐに」

Sagau't it klear is, stjoer ik it jo fansels.「完成したら，もちろん私はそれをあなたに送りますから」

☞ (u) sadree't, sadree as も同様の意味を表わす。

(w) salang't [salάŋt], salang as「…するあいだはずっと」

Salang't wy yn 'e wrâld ferkeare, kinne wy alle dagen leare.「この世に生きるかぎり，私たちは日々学ぶことができる」(Beintema 1990：144)

(x) sa't [sat]「…であるのと同様に；…するとすぐに」

It kaam krekt *sa't* ik tocht hie.「まさに私が考えていたとおりになった」(ULI'S, B 1：21 変更)

De minsken bouden mar, *sa't* harren goed tocht.「人々はただ自分たちが良いと思ったとおりに建てた」(ULI'S, C 20：3)

Sa't it no liket, wurdt it noait wat.「どうもそれはいくらやっても何にもならないような気がする」(ULI'S, B 1：24)

Sa't ik der oankaam, gong de doar op.「私がそこに着いたとたんにドアが開いた」(Zantema 1984：844 変更)

☞ (j) lykas も「…であるのと同様に」という意味を表わすが，sa't と違って従属文以外の文成分も伴う点に注意。

(y) sûnderdat [sûndə(r)dɔ́t]「…することなしに」

Fia bibleteek kin men fan alle dingen oan 'e weet komme, *sûnderdat* men dêrfoar slim djoere boeken keapje moat.「図書館を利用すれば，(そのために) ひどく高価な本を買う必要なく，すべてのことを知ることができる」(ULI'S, C 20：6 変更)

De minsken wurde ferrifele, *sûnder dat* se der wat oan dwaan kinne.「人々はそれについて何もできずにだまされてしまう」(ULI'S, C 11：

6 変更)

☞ *sûnder't という語形はない点に注意 (§ 66 (1)(c))。

(z) sûnt [sunt], sûntdat [súndɔ́t]「…して以来」

Sûnt se hjir is, is it hieltyd rûzje.「彼女がここに来て以来, いつも喧嘩だ」(Zantema 1984 : 1011 変更)

{*Sûnt*/*Sûntdat*} er ferfearn is, haw ik net wer mei him praat.「彼が行ってしまってから, 私は彼と再び話をしていない」

☞ sûnt は「…以来」という前置詞と「それ以来」という副詞としても用いる。sûnt←sûnt+'t (§ 66 (1)(c))

(α) troch't [troxt], trochdat [trɔ́(γ)dɔ́t]「…であることによって」

Trochdat it sa lang oanien reinde, fersutere de hiele tún.「とても長く雨が降り続いたために庭が全部台なしになった」(Boersma/Van der Woude 1980² : 59)

(β) útsein dat [ýtsaindɔ́t, ..sɛin..]「…であることを除いて, …であることのほかに」

It waar hold him goed, *útsein dat* it justjes reind hat.「少し雨がぱらついたことを除けば, 天気は持ちこたえた」(Visser 1985 : 63)

☞ *útsein't という語形はないことに注意。

☞ (b) behalve(n) dat も同様の意味を表わす。

(γ) wannear't [vɔnĺət]「もし…ならば, …するときに」

Wannear't hy dy bedragen hat, moat er dy it jild werom jaan.「もし彼が君をだましたのならば, 彼は君にお金を返さなければならない」(Boersma/Van der Woude 1980² : 58)

☞ wannear't は時間を表わす関係副詞としても用いる (§ 45 (3)(e))。
(a) as ①も類似した意味を表わす。(c) doe't との相違に注意。

(δ) wylst [vilst], wyl't [vilt], {wyls [vils]/wiles [víləs]/wilens [víləⁿs]} dat, tewylst [təvílst], tewyl't [təvílt]「…しているあいだに ; …であるのにたいして」

Gean mar efkes sitten, *wylst* ik it neisjoch.「私がそれを調べているあ

いだに腰をかけていてください」(ULI'S, B 1 : 21)

Ik lês in boek, *wylst* sy in jumper breidet.「彼女がセーターを編むあいだ，私は本を読む」(ULI'S, B 1 : 24)

Wilens dat hy fierder arbeide, beseach ik it spul ris.「彼が引き続き働いているあいだに，私はそれを見直した」(Zanema 1984 : 1188)

Wyl't de boer knippere, makke it folk wille.「農夫が昼寝をしているあいだに，使用人たちは好き勝手なことをした」(Zantema 1984 : 1189)

Om mar fuort te farren, sei de jonge, sil ik de brij mar opite, *tewyl't* mem bidt.「『出かける前に』と少年は言った『お母さんがお祈りしているあいだに，おかゆをたいらげて腹ごしらえしておこう』(本来，食前の祈りがすむまでは食べてはいけない)」(Beintema 1990 : 24)

Do ytst al, *wylst* wy noch net ree binne.「私たちがまだ用意ができていないのに，君ははもう食べている」(ULI'S, B 1 : 22 変更)

☞ wylst, wilens は副詞としても用いる。

Gean mar troch; *wylst* meitsje ik my klear.「どうぞ最後までやってください。そのあいだに私は準備をしますから」(Zantema 1984 : 1189)

Wilens gong ik fierder.「そのあいだに私はさらに進んだ」(Zantema 1984 : 1188)

したがって，{wyls/wiles/wilens} dat という語形に注意。

(3) dat

dat は後続する文の定動詞の語順に従って，従属文を伴う場合と主文を伴う場合がある。

(a) 従属文を伴う dat

これは従属接続詞としての dat であり，他の箇所でも一部言及した。

① 主語としてはたらく場合と枠外配置

[*Dat* hy noch nea kommen wie te sjen], fernuvere my.「彼がまだ一度も見にきていなかったことが私にとって驚きだった」(ULI'S, B 19 : 25)

[*Dat* der neist ekonomyske ek noch oare ynfloeden yn it moadebyld meispylje], is wol wis.「ファッションに経済的な影響とならんで他の影響も作用しているのは確かである」(ULI'S, C 4：10)

仮主語の it を置いて dat-従属文を外置し，枠外配置する例も言語使用や文体的な理由で頻繁に見られる（§ 37 (4)(d)④)。

It is goed *dat* in minske hobby's hat.「趣味をもつのは良いことだ」(ULI'S, A 19：19)

It is net fan de lêste tiid *dat* tal fan minsken yn 'e gaten ha dat ús natoer nei gychem giet.「人々の多くが自然が瀕死の状態にあることを認識したのは最近のことではない」(ULI'S, C 9：16)

It is no al oer it jier *dat* wy wat fan him heard hawwe.「私たちが彼の噂を耳にしたのはもう去年のことになる」(Zantema 1984：679)

It is hast altyd wurkleazens, *dat* der út fuortkomt.「その結果として生じるのはいつも失業だ」(ULI'S, C 20：3 変更)

前域以外ではこの it はない場合がある。

Dan sprekt *it* hast wol fansels *dat* der ferskil is.「それなら差があるのはほとんど当然と言える」(ULI'S, C 20：5)

Spitich wie Ø eins allinne *dat* it in lânskip sûnder sleatsje wie.「ただ，実のところ水路のない風景であることが興ざめだった」(ULI'S, B 20：15)

☞ 分裂文は 'it＋wêze の定形＋関係文' となる。
It binne altyd deselden *dy't* kleie.「文句を言うのはいつも同じやつらだ」(Hoekema 1992：14)

lykje「…のようだ」, skine「…のように見える」, blike「…であるとわかる」など，もっぱら真偽や蓋然性の度合いを意味する動詞では，外置による枠外配置が義務的である（Tiersma 1985：124)。

*[*Dat* er siik is], *liket*.「彼は病気のようだ」

It liket dat er siik is.「同上」

☞ 不定詞句を用いて次のようにも言える。

Hy *liket* siik *te wêzen*.「同上」

発言・思考・感情などの内容のように既成の事実を表わすのではない従属文の場合には，受動態では it ではなく，「虚辞の der」を置く（§ 58 (5)）。

Der wurdt sein *dat* der in nije skoalmaster komt.「新しい校長先生が来るという噂だ」(Bosma-Banning 1981²：140)

Der wurdt sein *dat* der yn earder tiden in grytman yn wenne hat.「そこには以前，地区の長が住んでいたと言われている」(Bosma-Banning 1981²：69)

Der wurdt op rekkene *dat* der in ferslach komt.「報告が出ることが見込まれている」(ULI'S，A 17：12 変更)

②と同様に，dat を伴わないで意味的に主語にあたる主文が用いられることがある。発言・思考・感情などを表わす動詞を用い，話法の助動詞を含まない肯定文に続く場合が多い。次の 3 例を参照。ただし，最後の用例の tinkt my「思うに…」は先行する主文への付け足しにすぎない。

My tinkt, it *kin* hjoed sa wol ta.「私は今日はもうこれで十分だという気がする」(Bosma-Banning 1981²：135)

My tinkt, *dat* wy dit net gewurde litte kinne.「我々はこれを放任できないと私は思う」(ib. 111)

Mantsjes sykje wyfkes út, mar ek oarsom by mosken, tinkt my.「思うに，オスはメスを捜しあてるものだが，スズメの場合には逆のこともあるらしい」(ib. 123)

② 目的語としてはたらく場合（§ 37 (4)(d)④）と枠外配置

この場合には枠外配置は義務的である。これは統語的な制約であり，①と違って言語使用や文体的な理由によるものではない。

Ik tocht *dat* wy noch genôch sokken en broeken hiene.「うちにはまだ靴下とズボンは十分あったと思ったんだが」(ULI'S，A 4：8)

*Ik haw [*dat* wy noch genôch sokken en broeken hiene] tocht.「同上」

①と同様に，dat を伴わないで目的語にあたる主文が用いられることが

ある。発言・思考・感情などを表わす動詞を用い，話法の助動詞を含まない肯定文に続く場合が多い。

Mar hja klage net, want se wist, it *koe* net oars.「しかし，彼女は不平を言わなかった。というのは，しかたないということがわかっていたからである」(ULI'S，B 2：13)

Ik fernim, jo *kinne* net.「私はあなたには無理だと思う」(Boersma/Van der Woude 1980²：89)

この構文は間接話法の表現としても用いる。

Hy sei, hy *koe* der gjin tiid foar fine.「それには時間がありそうもないと彼は言った」(Bosma-Banning 1981²：135)

用法によっては「dat-主文」も可能である ((b)①)。

③ sa...dat-従属文

sa の内容を表わす「dat-従属文」が枠外配置されている。

Mei frij wat minsken sil it *sa* wêze *dat* it begjin en de ein fan har libben him ôfspilet yn it sikehûs.「かなり多くの人々にとって人生の始まりと終わりは病院で起こるものだろう」(ULI'S，B 6：8)

④ 結果：sa＋形容詞...dat-従属文「あまりに…なので～」

dat は先行する主文の 'sa＋形容詞' の内容に呼応して結果を表わす。「dat-主文」も可能である ((b)②)。

Juster waaide it *sa fûl*, *dat* der hûnderten beammen sneuvelen.「昨日は風が非常に強かったので，何百本もの木が倒れた」(Boersma/Van der Woude 1980²：59 変更)

It is hjoeddedei *sa fier*, *dat* mannichien, dy't syn of har wurk no ienkear yn 'e stêd hat, op in doarp wennet yn 'e omkriten fan dy stêd.「今日では，都市に職場がある人でもその多くがその都市の周辺の村に住むというまでになっている」(ULI'S，C 11：2)

☞ (2)(t) sadat 参照。

⑤ 目的：「…するように」

Wy binne der betiid ôf gongen, *dat* wy (mar) mear tiid hawwe soene.

「もっと時間があるように私たちは朝早く起きた」(Visser 1985：515)

Wy sizze dit *dat* jimme dêr ris oer neitinke sille.「私たちは君たちがそのことを一度じっくり考えてみるようにというつもりでこのことを言ってるんだ」(Popkema 1987：47)

☞ オランダ語では opdat を用いるが，西フリジア語には *op't，*opdat という語はない。(2)(t) sa dat 参照。

☞ dat-従属文からの文成分の取り出しついては§ 44 (5)参照。

⑥ 同格節 (§ 45 (3)(e)③, § 66 (1)(b)③)

Hiel wat minsken binne *fan betinken dat* de moade foar in lyts part fan it folk fan betsjutting is.「人々の多くはファッションがごく一部の人にしか意味がないという考えだ」(ULI'S, C 11：4)

Mar dat wiene net *de iennichste kearen dat* ik stilstie.「しかし，私はそのときの何度かだけ立ち止まったわけではなかった（＝それは私が立ち止まった唯一の何度かではなかった)」(ULI'S, B 20：15)

⑦ 感嘆文での用法

次のような表現で用いる (Tiersma 1985：99)。

Kâld *dat* it wie!「寒かったといったらないよ」

Swimme *dat* er koe!「彼女の泳ぎが何とまあ，うまかったこと」

(b) 主文を伴う dat

主文を伴う dat には以下の 3 つの用法がある。従属文を伴う dat にも①と②の用法があるが，①では(c)で述べるように主文を伴う dat にたいして顕著な相違が認められる。

① 目的語としてはたらく場合

発言・思考・感情などを表わす動詞を用い，話法の助動詞を含まない肯定文に続く場合に現われる。

Ik leau *dat do wolst* it graach witte.「私は君がそれを知りたがっていると思う」

Ik leau *dat hy wol* it graach witte.「私は彼がそれを知りたがっていると思う」

② 結果：sa＋形容詞...dat-主文「あまりに…なので～」

Hy krige it sa drok *dat* ik *koe* der net fierder op ynfreegje.「彼はとても忙しくなったので，私はそれ以上教えてもらえなかった」(Bosma-Banning 1981²：102)

Op it lêst waard er sa lilk, *dat* hy *fleach* oerein en wiisde ús de doar.「しまいに彼は至極立腹し，席を立って私たちに出ていくようにドアを指さした」(ib. 102)

☞ (2)(t) sadat を参照。

③「したがって…」

'Fanke' hat gjin meartal, *dat* dan *brûke* wy: 'famkes' of 'fammes'.「fanke（小娘，蔑称）には複数形がないので，famkes または fammes を用いる」(ULI'S，B 1：7 変更)

②と類似した用法だが，「dat-従属文」にはこの用法はない。

Ik ha har yn lang net sjoen, *dat* sy *sil* wol net goed wêze.「私は彼女に長いこと会っていないので，彼女はたぶん調子が悪いのだろう」(dat-主文) (De Haan 1987：64 変更)

⇔*Ik ha har yn lang net sjoen, *dat* sy wol net goed wêze *sil*.「同上」(dat-従属文) (ib. 65 変更)

単独の主文として現われることもある。「dat-従属文」では不可。

Myn winkeltsje rint net min. It saldo is alle jierren wat heger. *Dat* it *kin* wol lije dat it in supermerk wurdt.「私の店は景気が悪くない。売り上げは年々少しずつ高くなっている。だから，スーパーになってもいいと思う」(ULI'S，A 13：8 変更)

Dat wês op jim iepenst en brûk oeral dêr't mooglik is ús eigen taal.「ですから，可能な場合にはどこでも我々自身の言葉を使うように留意しなさい」(Stienstra 1982：32)

It hynder wie *sa âld* wurden *dat* it *koe* gjin wein mear lûke. Doe woe syn baas him net langer te iten jaan. Mar djip yn syn hert begrutte it him wol om it bist. *Dat* hy *sei* tsjin it hynder: "Ik kin dy wol net mear

brûke, mar ik wol it goed mei dy meitsje.”「馬は年をとりすぎて，もはや車を引くことができなくなった。そこで飼い主はもう馬に食べ物をやるまいと思った。しかし，心の底では馬のことがかわいそうに思えた。そこで，飼い主は馬に言った。「もうおまえは使いものにならん。だが，悪くはしないでやろう」(Bosma-Banning 1981²：27 変更)

Dat sadwaande gie ik op ûndersyk út.「そのようなわけで，私は偵察にでかけた」(dat sadwaande「したがって…；それが理由だ」) (ib. 34)

☞ dat が従属文のほかに主文も伴う現象は西フリジア語使用地域の東側に隣接するオランダ語フローニンゲン方言（オ．Gronings）にもあり，すでに Overdiep (1938/39：(1947：147 f.)) が指摘している。

(c) 目的語としてはたらく「dat-主文」と「dat-従属文」

目的語としてはたらく「dat-主文」は語順から見ると並列接続詞だが，「dat-従属文」と同様に定動詞の要求する文成分である。両者にはこのほかに以下の共通点と相違点がある。空所化を除いて相違点が多い。

① 共通点：空所化

目的語としてはたらく「dat-主文」は「dat-従属文」と同様に空所化((1)) を起こさない。

Germen sei *dat* hy wat tsjin my *sei*.「ゲルメンは彼が私に何かを言ったと言った」

→*Germen sei *dat* hy wat tsjin my ∅.「同上」

Germen sei *dat* hy *sei* wat tsjin my.「同上」(De Haan 1987：65 変更)

→*Germen sei *dat* hy ∅ wat tsjin my.「同上」(ib. 65 変更)

これは結果や「したがって…」を意味する「dat-主文」でその他の並列接続詞と同様に空所化が起こることと対照的である (Hoekstra 1985)。

Ik ha har yn lang net sjoen {*dat*/*dus*} sy *hat* my yn lang net sjoen.「私は彼女に長いこと会っていない。だから，彼女も私に長いこと会っていないことになる」

→Ik ha har yn lang net sjoen {*dat*/*dus*} sy ∅ my ∅ net ∅.「同上」(De

Haan 1987：65 変更)

② 相違点：人称代名詞主格連接形と補文標識の「活用」

「dat-主文」では「dat-従属文」と違って人称代名詞主格連接形を用いることができず (§ 38 (2), (3))，dat は「活用」しない (§ 38 (5), § 66 (4))。

i) Ik leau {**dat do/datsto*} it graach witte *wolst*.「私は君がそれを知りたがっていると思う」

Ik leau {*dat do/*datsto*} *wolst* it graach witte.「同上」

ii) Ik leau {*dat hy/dat er*} it graach witte *wol*.「私は彼がそれを知りたがっていると思う」

Ik leau {*dat hy/*dat er*} *wol* it graach witte.「同上」

③ 相違点：否定，話法の助動詞

目的語としてはたらく「dat-主文」は「dat-従属文」と違って否定文や話法の助動詞を含む文に続く場合には用いない。

i) Ik leau *net dat* Germen him wol rêde *kin*.「私はゲルメンが自分で身を守れるとは思わない」(De Haan 1983：45 変更)

*Ik leau *net dat* Germen *kin* him wol rêde.「同上」(ib. 45 変更)

ii) Germen *woe* sizze *dat* hy my sjoen *hie*.「ゲルメンは私を見かけたと言いたかったのだ」(De Haan 1987：62 変更)

*Germen *woe* sizze *dat* hy *hie* my sjoen.「同上」(ib. 62 変更)

④ 相違点：左方転移，間投詞

目的語としてはたらく「dat-主文」では「dat-従属文」と違って左方転移が起こり，間投詞を含む文も許される。

i) *Hy sei, *dat Germen dy* net komme *woe*.「彼はゲルメンのやつは来たがらないと言った」(ib. 63 変更)

Hy sei, *dat Germen dy woe* net komme.「同上」(ib. 63 変更)

ii) Germen sei *dat*, *godskes*, hy *hie* syn buorman sitten sjoen.「ゲルメンは，何と近所の人が列席しているのを見たぞと言った」(De Haan 1990：210 変更)

*Germen sei *dat*, *godskes*, hy syn buorman sitten sjoen *hie*.「同上」(ib. 210 変更)

⑤ 相違点：取り出しによる話題化

目的語としてはたらく「dat-主文」では「dat-従属文」と違って文成分を取り出して話題化し，前域に置くことができない。

Syn buorman sei Germen *dat* hy Ø sitten sjoen *hat*.「近所の人が列席しているのを見たとゲルメンは言った」

**Syn buorman* sei Germen *dat* hy *hie* Ø sitten sjoen.「同上」

(d) 目的語としてはたらく「dat-主文」と「Ø-主文」

両者は(c)で述べた点にかんして共通した特徴を示し，類似性が高い。

① 空所化

Germen sei {*dat*/Ø} hy *sei* wat tsjin my.「ゲルメンは彼が私に何かを言ったと言った」(De Haan 1987：65 変更)

→*Germen sei {*dat*/Ø} hy Ø wat tsjin my.「同上」(ib. 65 変更)

② 人称代名詞主格連接形と補文標識の「活用」

Ik leau {{*dat*/Ø} *do*/*{*dat*/Ø}-sto} wolst it graach witte.「私は君がそれを知りたがっていると思う」

Ik leau {*dat*/Ø} {*hy*/**er*} *wol* it graach witte.「私は彼がそれを知りたがっていると思う」

③ 否定，話法の助動詞

*Ik leau *net* {*dat*/Ø} Germen *kin* him wol rêde.「私はゲルメンが自分で身を守れるとは思わない」(ib. 45 変更)

*Germen *woe* sizze {*dat*/Ø} hy *hie* my sjoen.「ゲルメンは私を見かけたと言いたかったのだ」(De Haan 1987：62 変更)

④ 左方転移，間投詞

Hy sei {*dat*/Ø} *Germen dy woe* net komme.「彼はゲルメンのやつは来たがらないと言った」(ib. 63 変更)

Germen sei {*dat*/Ø}, *godskes*, hy *hie* syn buorman sitten sjoen.「ゲルメンは，何と近所の人が列席しているのを見たぞと言った」(De Haan

1990：210 変更)

⑤ 取り出し

*Syn *buorman* sei Germen {*dat*/Ø} hy *hie* Ø sitten sjoen.「近所の人が列席しているのを見たとゲルメンは言った」

参考文献

(前回までに掲載したものを除く)

Boersma, J./G. van der Woude. 1980². *Spraaklear II*. Ljouwert. AFUK.

De Haan, Germen. 1987. "De syntacticus als frisist". Yn: Dyk/Hoekstra (útj.). 1987. 57-80.

De Haan, Germen J. 1990. "Hoofd- en bijzinnen: Traditie en progressie". Yn: *Handelingen van het 40ste Nederlands Filologiecongres*. 's-Gravenhage. SDU Uitgeverij. 203-213.

Dyk, Siebren/Jarich Hoekstra (útj.). 1987. *Ta de Fryske syntaksis*. Ljouwert. Fryske Akademy.

Dykstra, K./K. Heeroma/W. Kok/H. T. J. Miedema (útj.). 1960. *Fryske stúdzjes oanbean oan prof. dr. J. H. Brouwer op syn sechtichste jierdei 23 augustus 1960*. Assen. Van Gorcum.

Duden-Grammatik. 1995⁴. *Duden-Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. (*Der Große Duden* Bd. 4). Mannheim et al. Dudenverlag.

Hoekema, Teake. 1961. "Jan Jelles Hof oer al-as-dat-of-oft". *Us Wurk*. 10. 17-19.

Hoekema, Teake. 1990. "De bynwurden as, at, dat, of, oft". *Us Wurk*. 39. 64-76.

Hoekstra, Eric. 1993. "Dialectal variation inside CP as parametric variation". *Linguistische Berichte. Sonderheft* 5/1993. 161-179.

Hoekstra, Jarich. 1985. "Oankundiging en besprek fan *Friserstudier III Udgivet af Niels Danielsen, Erik Hansen, Hans Frede Nielsen. Odense Universitetsforlag 1983*'. *It Beaken* 47. 48-51.

Hoekstra, Jarich. 未刊. "The split CP hypothesis and the Frisian complementizer system". 1-19.

Overdiep, G. S. 1938/39. "Over Nederlandsche en Friese taalkunde". *It Beaken* 1. 68-84. (Yn: Overdiep 1947. 136-153).

Overdiep, G. S. 1947. *Volkstaal en dialektstudie. Verzamelde opstellen over taal- en letterkunde* (bezorgd door G. A. van Es). Antwerpen. N. V. Standaard-Boekhandel.

Paardekooper, P. C. 1987². *ABN-uitspraakgids*. Antwerpen. Heideland-Orbis.

Popkema. Jan. 1979. "As alle assen iene wiene". *It Beaken* 41. 259-290.

Popkema, Jan. 1987. “Inkelde opmerkings oer Fryske en Nederlânske syntaksis”. Yn: Dyk/Hoekstra (útj.). 1987. 46-56.
Van Coetsem, Frans. 1960. “De Friese relativa en conjuncties met *’t*”. Yn: Dykstra e.o. (útj.). 1960. 327-334.
Van der Woude, G. 1960. “Oer it gebrûk fan *’t* by bynwurden”. Yn: Dykstra e. o. (útj.). 1960. 335-343.

＊本稿は筆者の以下の論文に続く西フリジア語の文法構造の記述である。
「西フリジア語の音韻と正書法 (1)」(北海道大学文学部紀要 44-1. 第 85 号. 1995. 37-81)
「西フリジア語の音韻と正書法 (2)」(北海道大学文学部紀要 44-2. 第 86 号. 1995. 43-111)
「西フリジア語の文法構造 ── 冠詞，名詞，形容詞 ──」(北海道大学文学部紀要 45-1. 第 88 号. 1996. 21-81)
「西フリジア語の文法構造 ── 代名詞 ──」(北海道大学文学部紀要 45-2. 第 89 号. 1996. 79-176)
「西フリジア語の文法構造 ── 数詞，副詞，der ──」(北海道大学文学部紀要 45-3. 第 90 号. 1997. 171-246)
「西フリジア語の文法構造 ── 前置詞と後置詞 (1) ──」(北海道大学文学部紀要46-1. 第 91 号. 1997. 23-62)
「西フリジア語の文法構造 ── 前置詞と後置詞 (2) ──」(北海道大学文学部紀要46-2. 第 92 号. 1998. 41－64)
記述上の問題点については筆者の次の論文を参照。
「西フリジア語文法記述の問題点」(北海道大学文学部紀要 44-3. 第 87 号. 1996. 41-107)

＊本稿は平成 9 年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。
研究課題：「連続性概念による言語モデルの再構築 ── ドイツ語研究の諸相から」. 基盤研究(B)(2). 課題番号 08451101 (研究代表者　北海道大学言語文化部助教授　佐藤俊一)

【訂正】
「西フリジア語の文法構造 ── 数詞，副詞，der ──」
＊ 224 ページ下から 4 行目
誤：まとめて「後域（ド. Nachfeld）成分」
正：「右枠」(ド. rechte Klammer)
「西フリジア語の文法構造 ── 前置詞と後置詞 (1) ──」

＊ 25 ページ 5 行目
　誤：後域の動詞成分
　正：文末の動詞成分（「右枠」（ド．rechte Klammer））
＊同 6 行目
　誤：後域
　正：文末（右枠」）
＊ 50 ページ下から 4 行目
　誤：後域成分
　正：文末に置かれた動詞成分（「右枠」ド．rechte Klammer）
（上記以外の誤植・訂正・追加については別の機会に譲る）